



# くものいと

Kumo-no-ito

No. 59

関西クモ研究会

February 2026

# くものいと No. 59

February 2026

## 目次

ワスレナグモを兵庫県川辺郡猪名川町で採集 飯森槻丞 .....	1
都市公園のトゲグモ, その卵囊の記録 桂孝次郎 .....	2
琉球だより (1) 新海明 .....	5
琉球だより (2) 新海明 .....	10
ナカムラオニグモの1採集記録 飯森槻丞 .....	15
兵庫県南部の酒蔵施設におけるヒトエグモの生息事例 辻雄介 .....	16
別府隆守氏収集の高知県産ザトウムシ目標本 辻雄介 .....	21
京都府におけるキノボリコモリグモの記録 加村隆英 .....	25
座間味島で採集されたクモ 加村隆英 .....	27
クモが円網の中心で下を向いているのは逃げるため 西川喜朗 .....	29
関西クモ研究会 2025年度 採集会の記録 (滋賀県長浜市西浅井町 山門水源の森)	30
関西クモ研究会 2025年度 例会の記録 .....	38
関西クモ研究会 2024年度 会計報告 .....	40

## ワスレナグモを兵庫県川辺郡猪名川町で採集

飯 森 槻 丞

私は猪名川町初記録と思われるワスレナグモ *Calommata signata* Karsch 1879 を採集したので、報告しておく。

1♂, 兵庫県川辺郡猪名川町松尾台, 2-X-2025, 飯森槻丞採集・保管。

採集地は 1970 年代に造成されたニュータウンで、小規模な森林、草地が点在している。今回、草地が目のある建物の周辺を 2 頭（ともに♂）が歩行しているのを発見し、本種は環境省レッドデータで準絶滅危惧種に指定されているということを考慮して、1 頭はそのままにしておき、もう 1 頭を採集した。同個体は液浸標本にして保存している。

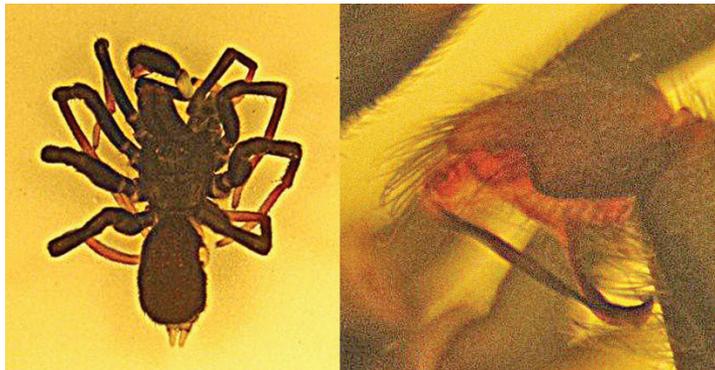


図 1. 採集したワスレナグモ♂（左）とその触肢。

末筆ながら、猪名川町での記録の有無を調べていただき、くものいとへの投稿を快諾して下さった加村隆英博士にお礼申し上げます。

### 参考文献・参考ウェブサイト

猪名川町の歴史年表, 猪名川町ホームページ. <https://www.town.inagawa.lg.jp/soshiki/1004/gyomu/10/1321.html> (2025 年 10 月 3 日閲覧)

小野展嗣 (編) 2009. 日本産クモ類, 東海大学出版会.

環境省, いきものログ, レッドリスト・レッドデータブック. <https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/booklist> (2025 年 10 月 3 日閲覧)

新海栄一 2017. 日本のクモ (増補改訂版), 文一総合出版.

## 都市公園のトゲグモ, その卵囊の記録

桂 孝次郎

筆者は、2020年7月12日、大阪市西区鞆公園にてトゲグモ *Gasteracantha kuhlii* を発見し、大阪市内の記録として Nature Study に報告した (桂 2020)。

その後も鞆公園ではトゲグモを何度も発見したが卵囊は見つからず、調査と飼育実験を続けていた (表 1)。

表 1. 鞆公園におけるトゲグモの記録.

採集日	地名	備考 1
2020. 7. 12 経度緯度 ( 34.686237,135.494739 )	大阪市西区鞆公園、東園、 5s 地区	「いのちの森」ハラン群落東側地上2m,大阪府で3番目の記録、大阪市内では新記録、Nature Studyに投稿した。標本は酢エチ処理後アセトン乾燥して昆虫微針標本にした (標本寄贈：大阪市立自然史博物館)
2020. 7. 19 経度緯度 ( 34.686107,135.494414 )	大阪市西区鞆公園、東園、 5s 地区	写真記録「いのちの森」ハラン群落西側、地上2m,網の下部の周辺部に、白い隠れ帯?模様発見写真撮影後、産卵目的で現地に放置したが、3日後いなくなっていた。(鞆公園2番目記録)
2020. 7. 20 経度緯度 ( 34.685626,135.495042 )	大阪市西区鞆公園、東園、 5s 地区	写真記録「いのちの森」入ってすぐのクササギの近くのとこ、地上2m,産卵目的で現地に放置したが、4日後、いなくなっていた。(鞆公園3番目記録)
2020. 7. 20 経度緯度 ( 34.686120,135.494951 )	大阪市西区鞆公園、東園、 12s 地区	写真記録「いのちの森」掲示板の西側カラタチのところ、地上1.5m,産卵目的で現地に放置したが、3日後さらに高所の3m近くに移動していたが、4日後いなくなっていた。(鞆公園ではの4番目記録) どんな卵囊で?どこ?に産むのか確かめなかったが残念
2021. 7. 4 経度緯度 ( 34.685725,135.495015 )	大阪市西区鞆公園、東園、 30 地区、	写真記録。幼生のため放置。アジサイ群落とアジサイ群落の間の空間。巣は地上1.5mで1.2以下にはギンメッキゴミグモの巣が多数あり、空間を機み分けていた
2024. 7. 7 経度緯度 ( 34.684620,135.493569 )	大阪市西区鞆公園、東園、 12 地区「いのちの森」入口	幼生、写真撮影した。自宅に持ち帰り飼育、7/11脱皮した。標本は酢エチ処理後アセトン乾燥して昆虫微針標本にした
2024. 7. 8 経度緯度 ( 34.684620,135.493569 )	大阪市西区鞆公園、東園、 5 S 地区「いのちの森」	幼生、写真撮影した。自宅に持ち帰り飼育。エサを与えたが食べず広い網の中で死亡
2024. 7. 29 経度緯度 ( 34.685322,135.495782 )	大阪市西区鞆公園、東園、 27 地区	写真記録,産卵目的で現地に放置したが、7日後、いなくなっていた。
2024. 9. 1 経度緯度 ( 334.685716,135.49513 )	大阪市西区鞆公園、東園、 12 地区、「いのちの森」	(セミのぬけがら調査にて) 発見場所は「いのちの森」の中、ここは林内でもかなり暗いところなので、ここならトンボや鳥に襲われないのかも?持ち帰り、柱の屋上にて産卵目的で飼育、小蛾を捕食したが卵囊は発見できず、10/2死亡。アセトン乾燥標本にする
2025. 9. 14 経度緯度 ( 34.686261,135.494546 )	大阪市西区鞆公園、東園 5s 地区	(セミのぬけがら調査にて) 「いのちの森」の一番禺のハランの北側、自宅に持ち帰りフィルムケースに入れ、枯葉と湿度用にコケを入れたら9/19枯葉にテント状のネコハグモの巣のような形の卵囊を産んだ、ケースから出してしばらくしても母体は卵囊から離れず寄生蜂などから守っているように見えた



図 1. フィルムケース内で産卵したトゲグモとその卵囊.

2025年9月14日、韮公園にて見つかったトゲグモをフィルムケース(直径30mm, 高さ61mm)に入れ、ケース内での転倒防止用に枯葉と湿度保護のためのコケを少し入れて持ち帰ったところ、5日後にその枯葉に卵囊を産んでいることがわかった。

トゲグモの卵囊はトリノフンダマシのようなつり下げ型かも？と思っていたが、予想に反して枯葉の凹みを利用したネコハグモの巣のような形をしていた(図1)。写真撮影のためにケースから出してしばらく観察をしていたが、母体は卵囊から離れようとはせず、寄生蜂などから守っているのかもしれないと思った。加藤(1999)は本種の卵囊の観察事例を報告しており、それによると、卵囊は樹幹表面に産み付けられ、外観は地衣類に似ている、とのことである。

また、加藤(1997)は幼生の飼育観察を行い、成虫になるまでの形体変化をみごとに調べている。筆者は、同年10月20日にフィルムケース内の卵囊から多数の子グモが生まれたので、その生まれたての幼生を写真撮影後、韮公園「いのちの森」の親グ



図 2. トゲグモの生まれたての 1 齢幼生.

モがいた場所に放した。生まれたばかりの子グモは、丸く棘はなく腹部の斑紋は黒地に白い斑紋で親グモに似た模様になっていて面白いと感じた (図 2)。

今回は小さいフィルムケース内での観察なので、実際に野外にて卵囊を発見したいと思っている。

おわりに、トゲグモの卵囊に関する情報を調べていただいた加村隆英先生に厚くお礼申し上げます。

#### 参考文献

桂孝次郎 2020. 大阪都心の鞆公園「いのちの森」で見つかったトゲグモ. *Nature Study*, 66 (12): 7-8.

加藤むつみ 1997. トゲグモの成長に伴う形態変化と脱皮型の変化 - トゲグモのトゲはいつ生えるか -. *Kishidaia*, 72: 22-26.

加藤むつみ 1999. トゲグモの卵のうと越冬. *Kishidaia*, 76: 27-29.

## 琉球だより（1）

新海明

### 沖縄前夜

学生時代（1970年代前半）に奄美や沖縄に飛行機で出かける友人がいた。贅沢な話だ...と思っていた。クモなどの生物調査に行くのならば南方に出かけるのが当たり前のように言われていたが、私は全く興味がわかなかった。むしろ北の大地に感心があった。北海道と東北陸中には毎年通い続けていた。今では誰もが知っている、しかし、あの頃は無名だった富良野の麓郷の森で大量のエゾトタテグモに出合った。それも林床からだった。根曲竹（正式な種名かは怪しい）を剪定ばさみで切り取りながら土壌中の小動物のサンプルを集めているときに土の中から出てきたのだった。JR 根室本線の山部駅（2024年に廃駅となってしまった）の近傍にあった演習林のツルグレン装置に土壌サンプルをセットしたら、残りの時間は北海道の観光地巡りに費やすことができた。ステーションビバークしながら（というとかっこいいが、駅の待合室や入り口での「ごろ寝」である）、列車を乗り継いで各地を回った。当時有名だった、いわゆる「カニ族」というやつだ。

大学を卒業して教員となっても南の島への関心は相変わらずなかった。その後に50回以上も通うようになった沖縄行のきっかけは、やはり「ジョロウグモ」だ。70年代から80年代に切り替わるころ、私はクモの調査は続けていたものの「何」をやってもよいのかわからなかった。就職して4~5年が経ち仕事にも慣れてきた。おそらく当時は会社などに入った誰もが経験したであろう組合の仕事（労働組合の活動がまだ盛んだっただけ）もあれこれ任せられた。組合の会議は連夜のように入り、唯一の楽しみは会議後の仲間との飲み会だった。ほぼ毎晩、飲み屋通いをしていた気がする。ほろ酔い気分家で家に帰ると、誘蛾灯の周りではジョロウグモが毎夜網張りをしていた。何気なく見ていたらジョロウは網の交互半分ずつを更新しているのに気づいた。今夜は右側、昨晩は左半分...という具合だったので、毎晩その記録を取り続けていた（新海2005）。

今になって思えば、網研究の始まりはこの時の観察からだった。あるとき、晩秋だったと思う。ジョロウの網の更新を見ていたら不思議な行動に出合った。ジグザグの足場糸から縦糸が枝分かれしながら継ぎ足されていったのだ。兄に尋ねると、当然知っていた。「そうだよ。縦糸は外周に行くに従い増やされるのだ」という。やはり既知の行動か、少しがっかりした。ところが、さらに縦糸張りの様子を観察していると1本だった縦糸が、足場糸の作成の際に突然2本に分割されるのに気づいたのだ。兄にこのことを伝えると、そんな行動は「知らない」といって庭まで確認に来てくれた。この当時、兄の知らないことはイコールすべてのクモ屋の知らないコトと同じだった。私は興奮して何度も繰り返して観察し、兄にもその行動を見てもらった。

## ジョロウグモの網構造の再検討

この小見出しは私が初めてクモの網について報告した論文の題名である。誰もが知っているジョロウグモの網に、まだその道の研究者に知られていない造網の秘密があることを知って、私はクモ網の調査に一気にのめりこんだ。クモを採集して名前を調べることや個体数の多少、フェノロジーなどいろいろな角度であれこれやってきた中で初めて調査することに興奮を覚えたのだ。次は何を調べようか。そのためにどんな工夫をしようか。かつて感じたことがない高揚感だった。

最初に取り組んだのは文献の調査だった。ジョロウに関するものを、日本で書かれたクモの入門書や図鑑・解説書などから片端から読み漁り、網についての記事を調べあげた。そして外国の文献へと広げていった。いずれの文献にも「二分割糸」と思われる行動の記録はなかった。おそらく、その時点で「これは、いける」と踏んだのだろう。とにかくジョロウの造網で調べたことをクモ学会で報告せねばと考えた。1981年の日本蜘蛛学会大会は新潟県南魚沼の湯之谷温泉で開催された。私はまとめ上げた「青焼き」のスライドを抱えてワクワクしながら、台風が迫った雨の中を上越線の小出駅へと向かったのを今でもありありと思い出す。ジョロウという最もありふれたクモなのにいまだ知られていない網の秘密を会員に紹介したくてたまらなかった。

発表後の反応はというと...実はあまりよくは覚えていない。しかし、驚きと感嘆で迎えられた雰囲気は感じたように思う。数多くの質問や懇親会での様子で読みとれた気がする。当時、平凡社から発行されていた「アニマ」という雑誌末尾の学会情報欄でも取り上げられていた。その後、八木沼先生からはご自身の持っていた網関係の文献を「全部差し上げる」と小包が届いた。この中にあった文献のひとつがロビンソン夫妻によるオオジョロウの網と餌捕獲に関するものだった。この文献を起点として次々と海外の情報に接することになった。当時は文献を求める手段も相手もなく、兄をはじめとするクモ関係者に「こんな文献がありませんか」と尋ねまわる以外になかった。大学時代の後輩の院生やら勤務先の図書館情報網をたよりに半年間をかけて入手したものもあった。苦心して手に入れた文献が届いた時の喜びはこの上もなかった。そんな中で吉田真さんが立命館大学でクモゼミを開催していると聞いたのだった。この研究室には吉田さんの他にハチの研究をしている遠藤彰さんが在籍し、クモやハチの研究者の垂涎の的であったプシケ (Psyche) という雑誌があった。毎月実施される京都衣笠のゼミに出席するたびに、私はプシケに掲載された論文のコピーをしていただいた。なんとコピーはすべて無料だった。こんな経緯で当時のクモ網に関する世界中の論文を入手することができたのだった。

さらに、忘れてならない方がもう一人いた。中南米のコスタリカ在住のエバハードさんだ。1980年初頭、私は同氏やその奥様 (ウエスト・エバハード) の研究にはほとんど触れておらずにいた。1983年だったと思う。勤務していた学校にエバハードさんから封書が届いた。開くと中にはエバハードさんの近著別刷りと手紙が入っていた。I read your ~ の read に斜線がひかれ、その下に see と補ってあった。別刷りはなんとサイエンスに掲載された論文で「この中の図と、あなたがアチプスに発表した図がき

わめてよく似ている。要約と図の説明を送ってほしい」というものだった。彼は、私がアチプスに投稿した、それこそ中高生の夏休みの自由研究のような和文を見てくださったのだ。エバハードさんとの論文交換はその後 15 年くらい続き、彼と奥様の名声はさすがの私にも届いてきた。

「蜘蛛キチ」と自称する彼から次々に送付されてきた論文は、研究の最前線を知る手助けとなった。さらに調査方法や造網構造の記述の仕方や考察など、その論文を通して大いに勉強させてもらったものである。

### オオジョロウの網を求めて

話は少し前に戻るが、私はロビンソン夫妻のオオジョロウの研究にも多数ふれることができた。この中にあったオオジョロウが張る円錐形のバリアの写真に目を奪われた。このような網があるのか...というものだった。そして、オオジョロウは日本の南西諸島にもいるのではないかと気づいた。さらに下謝名松榮先生により当地のジョロウグモの生活史も調べられている。沖縄にはオオジョロウとジョロウの両種が生息している。「これは行かねばならない！」1982年7月。夏休みを利用して、ついに南西諸島に出かける決心をしたのだ。

そのころ、羽田から那覇への運賃は往復で 68,000 円余り、割引切符や格安航空などない時代だった。薄給の身にはかなりつらい出費だったが、それでも構わなかった。ジョロウやオオジョロウの網を見てみたかった。さらにスズミグモも。

沖縄に行くにあたり下謝名先生に手紙を認めた。やはり「先達はあらまほしき」ことだと思ったからだ。那覇についたその日、私はその周辺の公園緑地に行けばオオジョロウにすぐに出合えると思っていた。案の定、そうは問屋が卸さなかった。見たのはチブサトゲグモばかりで、オオジョロウは網の欠片さえ見えなかった。翌日、宿舎で下謝名先生と合流して知花城（「城」はグシクとかグスクと呼ばれ、内地の「お城」とは少し意味合いが異なっている）へ連れて行ってもらった。あとで考えると先生は、どうやらその時には私に「沖縄」トタテグモを見せたかったようだった。残念ながらそのころの私は地中性のクモには全く関心がなかったのだ。私はグシクの手前のサトウキビ畑の廃車のそばに張ってあったスズミやオオジョロウの網の前で夢中になって記録を取り始めたが、先生曰く「そんなクモならどこにでもいますよ」とたしなめられてしまった。確かにグシク内に入ると、ここにもあそこにもスズミやオオジョロウの網を見ることができた。下謝名先生にはオオジョロウやジョロウは沖縄島の北部に行けば、さらに多く見られることを教えていただいた。その後に通い詰めるようになった調査地である名護城や中城はこの時に知ったのだった。

### オオジョロウの網には…

網構造を調べるときの私の最大の武器は白のラッカースプレーだった。網にこれをかけると細部の造りがよく観察できた。エバハードさんはタルカムパウダーを使っていたが、ジョロウの大きな網には不向きな気がした。ただ、ラッカースプレーの弱点

は、小さく繊細な網では、噴霧の際に網そのものが壊れてしまうことであった。しかし、私がおの後に調査した網でも威力を発揮して、これで十分に対応できた。

知花城を訪れた 1982 年以降断続的に 20 年余り通った名護城では、麓から登る参道沿いにオオジョロウはいくらでも観察できた。白のスプレーを吹きかけて網構造の詳細をジョロウのものと比較しながら逐一記録した。私の興味はオオジョロウの網にも分枝や二分割糸が存在するのか。そのバリアは円錐状になっているか...だった。二分割糸は円網の外周部を見ればすぐにその存否がわかる。すなわち、円網の縁で縦糸が V 字形になっているのが二分割糸の証拠だ。分枝は網の中央から外側に向かって縦糸をたどれば分かった。その際に枝分かれしているかどうかを見ればよい。観察の結果、オオジョロウには分枝はあったが二分割糸は存在しなかった。近縁種でありながら網の造りは両者で異なっていたのだ。

このころにジョロウグモを最もよく調べていたのは、千国図鑑で有名な千国安之輔先生だった。「ジョロウグモの一生」という本も出版されていた。ある日、その千国先生からお手紙が届いた。「私もジョロウの網をよく見ているが、二分割糸など見たことはない」という内容だった。私はある意味で嬉しかった。なぜなら、先生の前掲著書の中の写真に二分割糸が見事に撮影されていたからだった。私自身もそれまでにたくさんジョロウの網を見ていたが、全く気付かなかった。千国先生も...か! といった感想だろう。その旨を認めてお返事した。ヒトは「見たいもの」しか見えないものだ。偉そうなことは言えないが、そういうものだとつくづく思わされた。

沖縄に戻ろう。オオジョロウで二分割糸は見当たらなかったが、私はこの時にスズミグモの網で二分割糸とよく似た構造を見た。正直に言えば沖縄のスズミで初めて「私が発見した」ものではなかった。実はその当時に入手した海外で出版された文献の図中で見つけたのだった。初めてその図を見たときはスズミにも二分割糸が存在するのか...と思ったので、沖縄ではこれも確認したかった。実際には「二分割」様の構造があったが、これが二分割糸かどうかは現地で確認できなかった。私は作成場面を見たかったのだ。スズミの造網は夜中に根気よく見続けなければならず、現地での「ハブに気をつけろ!」という周囲からのアドバイスに恐れをなして、東京にスズミを持ち帰って実家の庭に放して造網を観察するしかなかった。この詳細は、ずっと後になって報告した(新海 2020)。かいつまんでいえば、スズミは足場糸(スズミでは不粘性の横糸になる)から縦糸を枝分かれさせていくときに、行きに 1 本、帰りに 1 本引くのだが、外周のワク糸に達した際にある 1 点に付着することで結果的に V 字に見える形になるのだった。ジョロウとオオジョロウではワク糸に達したときに糸疣をわずかにずらして 2 点に付着する。こんなわけでスズミの二分割様の構造とジョロウの二分割糸は同じ V 字形に見えるものの本質的な違いがあることが判明したのだ。さらに付け加えて強調したいのは、ジョロウは足場糸を張るときに、すでにそこに張ってあった一本の縦糸を二つに分割するのに対して、オオジョロウとスズミにはこの行動が見られないということだった。

## オオジョロウの円錐バリア

ロビンソン夫妻の論文で見たオオジョロウの円錐バリアを沖縄でも観察したいものだ・・・オオジョロウやジョロウの網を調査しながら、次のテーマに着手した。どのように探したのかと言えば、オオジョロウと思われる網という網に白スプレーをかけて片っ端から見るしかなかった。やがて成体の網では見られないことが判ったので、幼体の網のバリアを探すことにした。ところがオオジョロウの網と認識できる、それなりの大きさに成長した個体でも、これまた円錐バリアはなかった。つまり、もっと小さな幼体の網を探すしかなかった。このオオジョロウの極小個体がどこにいたかが当時はわからなかったのだ。1982年7月から始まった沖縄行は、次は冬休みかあ...とも考えたが、その間が気になって仕方がなかった。「10月に行こう！」当時勤務していた学校はすでに週休2日制だった。今では当たり前だが、当時は珍しかった。後々になって、この学校を退職した際に「そんなに条件が良いところを辞めるなんて」と周囲から言われたものだ。私はこの土日の2日間を利用した。羽田を早朝に飛び立つと正午過ぎには中城まで入れた。その夜に名護まで行き、翌日名護城で調査をして夕方に那覇空港を出て帰京した。飛行機代にバス代やら宿泊費などめて10万円弱一泊二日の調査代は結構高がついた。同僚たちは「呆れた...」を通り越していたようだ。10月と12月、円錐バリアを訪ねた沖縄行はいずれも空振りだった。しかし、翌年3月に名護城の山頂に向かう舗装路のがけ地の枯れ枝に張られたオオジョロウの小さな網で、ついに円錐バリアを発見したのだ。私はリュックを道路に放り出して、枯れ枝に張ってある網にラッカースプレーを吹きかけ写真撮影に夢中だった。山頂から軽快に下りてきた車が急ブレーキをかけた。私は何度も頭を下げ詫びた。そして、枯れ枝をそっと道路わきに移動して観察を続けた。この時に撮った写真はアクタに紹介してあるので興味ある方はご覧いただきたい(新海1985)。ただ、いまだに悔いが残っていることがある。オオジョロウの幼体が張るこの円錐バリアはいったいどのように作成されるか調べていなかったことだ。そのころはジョロウの調査が一段落したときにでも...と考えていたが、とうとう現在に至るまで調べることが叶っていない。

## 引用文献

- 新海明 1985. ジョロウグモとオオジョロウグモの網構造の比較によるジョロウグモ属の由来の一考察. *Acta arachnol.*, 34(1): 11-22.
- 新海明 2005. ジョロウグモの網の張替え周期. *Kishidaia*, (87): 17-22.
- 新海明 2020. スズミグモの網構造の再検討. *Kishidaia*, (117): 9-13.

## 琉球だより（2）

新海 明

### 一本の幼木に張られた網

中城は定宿があった名護市に向かう途上に設けた、私の沖縄でのもう一つの調査地だ。羽田発の沖縄への一番機で那覇空港へ、バスを乗り継いで昼過ぎには中城にたどり着く。入口の手前に売店があり、ここで「沖縄」おむすびと飲み物を購入するのが恒例とした。「沖縄」と断ったのには訳がある。内地（当時、沖縄の方はこう呼ぶことが多かった。今もそうかも知れない）のおむすびと違っていたのだ。白米の中に沖縄独特の風味ある肉味噌？が入っていた。私はこのおむすびが気に入って、毎回ここでこれを食べることを楽しみにしていたのだ。あれから40年余り時は流れ、すでに中城の売店もここで売られていたおむすびも消え失せている可能性がある。

中城の入り口から公園内に入ると、右手に舗装道路が走っていた。この道沿いの空き地に沖縄桜と思しき幼樹が1本植えてあった。沖縄で初めて見るクモたちは何もかも目新しく、後に「ド」普通種だと分かったクモたちにも目を奪われた。私は、この1本の小さな木の間に張られた網の数に圧倒された。「内地」では考えられない密度だった。その時の記録が残っている。1本の木の大きな容積3.1 m<sup>3</sup>の中に造網していたクモを数えたもので、1983年の3月は69個体、5月は109個体、7月は88個体だった。1 m<sup>3</sup>中に換算すればおよそ20~30個体のクモの網があったことになる。種類としてはマルゴミグモ（現在のトゲゴミグモ）・チブサトゲグモ・オニグモ類などだった。私を感じたのは、これだけのクモの餌が存在するのか！...という驚きだった。実際にはここにいた多くのクモのすべてが成長できるわけでもないはずで、結局は見合った数のクモしか生き残れないに相違ない。

さらに、この道路沿いの些細な藪にキジロオヒキグモを見たのも驚きだった。私の少ない経験で、このクモは林内の樹間や藪で見られるような気がしていたので、直射日光は当たっていないものの、道路際の藪で出会ったことに感激して、その餌捕獲の様子を記録したのもここでの思い出のひとつ（新海1986）。

### トリノフンダマシの新種か！？

中城の外周道路沿いにはクワズイモが至る所にあった。私はこの大きな葉陰に注目した。トリフン類が昼の休憩をしているのではないかと思ったのだ。ハブを気にしながら目の届く範囲でクワズイモの一枚一枚の葉裏を覗き続けた。

すると「いた」のだ。見たこともない色彩をしたトリフンだった。採集した瞬間は「やった」と思った。「新種かもしれないぞ」腹部の両肩に白斑を持つトリフンなど見たことがなかった。ところが...である。その後の中城や名護城周辺で同じようなトリフンを次々に見つけたのだ。それらの腹部斑紋の変異を見比べると、両肩にあった特徴的な白斑は次第につながり、シロオビトリフンになっていることに気づいた。その

ころには内地でもアカイロが豊産する中に突然ソメワケが採れたり、ソメワケの卵のうを初めて観察したときに、アカイロの卵のうと全く区別できないことなどを知り始めていた（新海・新海 1996）。トリフンの仲間、特にアカイロやシロオビにも色彩変異があることにも気づき始めていたのだった。さらにソメワケやクロトリのオスは知られていなかった（これらはメスだけで記載されていた）。

1980年代当時はDNA研究もいまだに知られず、分類は職人技（今でもそういう側面はあるが...）と思われ、私のごとき網研究しかしていない「よそ者」が体色の違いなどで種を云々するのは大いにためらわれた時代だった。こんな時に私の見解を支持してくれたのは兄と谷川明男さんだった。心強い味方だ。この問題はすぐに解決したわけではなく、卵のうの形状やDNA調査によってソメワケトリフンはアカイロトリフンの、クロオビトリフンはシロオビトリフンの色彩変異であることが確認された（新海・谷川 2001, 谷川 2009, 新海・谷川 2010）。また、さらに後年になるが沖縄にはオオトリによく似ているマギイトリノフンダマシが存在することも明らかになっている（Tanikawa 2013）。

### オオジョロウグモとジョロウグモの成長の違い

中城公園での調査の思い出はほかにもある。沖縄へ通いだしてからずっと後のことだが、この地に毎月のように通いオオジョロウやジョロウの成長を調べていた時期があった。内地のジョロウは5~6月に現れて生育を続けて9月頃から成体になるが、沖縄では生育が異なっていた。内地よりも温暖でその生育は「早い」のではと思っていたのだが、実際には「遅い」のである。出現するのは4~5月とわずかに早い気がしたが、夏場に生育が止まるようだ。そして冬に成体の出現はピークを迎えて、翌年まで多くが生き残っていた。一化性であることは変わらなかった。

さらに沖縄島でのジョロウグモの分布も特徴的だ。山原（やんばる）では多く見られるのに南部には全くいない。下謝名先生は「知花城より北部に行かないとジョロウは見られない」と説明されていた。また、沖縄島のジョロウは夏場にその生育が止まるようだ。この要因について、私は中緯度に生息するジョロウの生育には「日長」が関わっているのではないかと...と妄想していたのだが、宮下直さんは夏場の餌量が減少することが原因ではないかという。確かに沖縄の夏は昆虫が少なくなっている気がしたので一理も二理もあると思うが、これも後に続く研究者の調査に委ねたい。夜の名護の酒場で篤く語り合ったのも遠い昔話となってしまった。

ジョロウとオオジョロウの違いは、このほかにもあることに気づいた。造網場所をあまり変えないジョロウに対して、オオジョロウは頻繁に移動するのだ。これが何を意味するのだろうか。宮下さんによれば、造網場所の度重なる移動はオオジョロウの成長にかかわっているというものだ。つまり、オオジョロウの方が餌のよく掛る場所を探しながら彷徨う頻度が高くなるわけだ。

### オオジョロウグモの幼体の葉上の網

造網性のクモはさまざまな場所にその網を張っている。ハナオニグモ・ムツボシオニグモやシロスジシヨウジョウグモは一枚の葉の表面上に円網を作っている。日本最大の造網性クモであるオオジョロウがなんと葉の上に円網を張っているのだ。これが1~2例なら驚きもしないのだが、ある時期には大部分の個体が葉上にその網を張っているからビックリだ（新海 1998a）。

オオジョロウのごく初期の幼体が葉上に水平円網を張る「意味」は何だろう。私の妄想は「葉を訪れる小さな昆虫を狙った網」ではないか...というものだ。葉に飛来する昆虫はかなり多くいる。私の経験的な観察でしかないが、飛翔性の昆虫たちは葉の上を「ヘリポート」としてよく訪れてとまる。この習性を利用して餌捕獲するクモがいるのではないかと私はにらんでいるのだ。たとえばツケオグモ類などのカニグモの仲間は葉上で終日一定の場所に糸の座布団を広げて餌を待っているようだ。葉上に円網を張るハナオニグモやムツボシオニグモなどもそこに飛来する昆虫を狙っている可能性があるろう。トリフンやナゲナワの幼体たちは葉のへりで夜間に両脚を広げて餌捕獲していた。さらにオオジョロウの幼体も...と、妄想は膨らむのだ。

ただ、これを確認する「術」を私は思いつかないのだ。とりあえず、葉上にどれくらい虫たちが飛来するかは調べられそう。しかし、それが「何（どこ）」とくらべて多いのか、少ないのか「何（どこ）」が思いつかなかった。枝や葉の大きさや形、滑葉か否か、葉の茂り方などいろいろと考えられはする。今後は、続く若手の執念に期待したい。

### 落葉落枝あるいは石に支えられた網

2010年代にネットやTV番組などで「飛行石」なる映像が度々紹介されたことがあった。池田博明さんが談話会通信に実験を伴う解説を書いたのもこのころだった（池田 2015）。

私が「飛行石」なるものを初めて観察をしたのは高校生の頃だった。何の記録も残していないが「こんな現象があるのか」とたいそう興味深かった。高尾山のケーブル脇の観察路を琵琶滝付近まで歩いてきた時だった。眼前に小さな石ころが空中に浮かんでいたのだ。私はその浮かんだ石の上に伸びていた糸にすぐに気づき、糸をたどった。上方の葉蔭にクモ網があった。コガネヒメグモだった。不規則網の糸は下方に行くに従いまとめられ、最下方の糸（これは不粘糸だった）1本に収束し、そこに「飛行石」があった。

私は、その後も飛行石的な現象を何度か見たし、関連した文献があることも分かった。古くは1951年に船津金松氏によって「採集と飼育」に「石を吊り上げるクモ」が、1957年には松山紘一氏によって「アチプス」に「石を吊したクモの網」が、私と同様にコガネヒメグモの不規則網の下端が落葉によって支えられてものは植村利夫氏がアクタに掲載されており、ビジョオニグモの例は松本誠治氏によりアチプスに報告されていた。その後、私は沖縄をはじめとした各地で観察した例をいくつかまと

めてキシダイアに報告した（新海 1998b）。

くだんの「飛行石」は「空中を舞っている不思議な石」として映像で紹介されることが多いが、舞っている石の上には必ず糸が存在することは、石の動きを見れば明らかなのにもかかわらず、「謎の飛行石」とキャプションが添えられる。TV などの不思議をあおる常套手段だ。

松山氏や松本氏の指摘通り、造網初期の過程で垂下したクモが、たまたまそこにあった何らかの物体（例えば小石・枝・葉）に糸を付着させ繰り返して補強するうちに、その糸の張力が増すことによって自然と吊り上げられたものと思われる。

## 沖縄のこと

沖縄の夏の日差しは内地（沖縄の人は本土のことをこう呼ぶことが多い）に比べればべらぼうに強い。けれども海から絶えず風が吹き込むために、東京のような不快な暑さを感じたことはあまりない。特に、木陰の涼しさは格別である。相変わらず夏になるとそぞろ沖縄に行きたくなくなる。初めのうちは無論、クモと泡盛に興味を持っていたのだが、最近では、沖縄の歴史や民芸にかなり心を惹かれている。私自身を含めて「内地」の人々で沖縄の歴史を知っている人がどれだけでしょうか。おそらく、大多数の人は太平洋戦争末期の沖縄をわずかに知るのみだろう。そして、その悪夢さえ内地では風化しつつある。中世の一大海洋国家であった琉球は、江戸時代初期の薩摩藩による「琉球入り」をはじめとし、明治に入ってから「琉球処分」、そして太平洋戦争末期の「沖縄戦」と、常に「ヤマトウンチュー」の侵略を受け、また「日本」の防波堤として、いくつもの災難の中で時を過ごしてきたのである。今も内地の大資本によって買い占められた海岸は、「ヤマトウンチュー」ばかりが闊歩し、沖縄の白砂と精神は無視されたまま汚され続けているような気がする。

去る夏の日、沖縄本島中部にある勝連半島にある勝連城に登った。ここからの眺望は沖縄本島全体が見わたされるかのようなのである。暫く時を過ごしたが、うるさいように四方から飛行機が飛び交う。ほとんどがアメリカ軍の戦闘機であった。ほんのひとときの休息さえなかった。沖縄の精神はやはり、沖縄に来て何か違うなと思う心なくしてはきっとわからないのだろうと思う。

沖縄でのクモの観察は大変に楽しいものだったが、ここでは何よりも沖縄の歴史と文化を通して、改めて「日本」が観察できたことが一番の収穫だったのかも知れない。

・・・と書いたのは今から 40 年も前の 1988 年のことだった。沖縄の実情と苦難はその後も続いているのだと思う。幾多の政治家や関係者たちの努力があったのも見てきた。けれども、沖縄の政治的な背景や琉球の人の心は実に複雑なのだろう。その後の県政や市政の長の交代劇はそのことを物語っているようだ。私が沖縄に通い続けていたところに、飲み屋で沖縄の過去・現在・未来を語っていると（若気の至りだ）、沖縄の方が周囲に人がいなくなると、その重い口を開いてくれた。「新海さん。皆さんの前では言いにくいのですが、実は…」と語り出す人が何人もいた。これとて、何回も

飲み屋に通い詰めた挙句にやっと語ってくれたように思う。そして、報道陣の前での発言と一個人の発言は区別せざるを得ないのだと言っていた。

遠い昔の、阿摩和利と護佐丸の戦の時代、あるいはそれ以前から続く琉球の歴史や日本の防波堤としての役割を強いられ、繰り返された差別の近世、さらに米軍統治下の戦後などの歴史の数々を学んだとしても、その上にさらなる問題点や琉球人の「気持ち」があるのだと思う。そしてこれらを考え続けてもなお解決には至らない困難がそこに存在する気がする。

ここでは、沖縄を琉球と書いた箇所がいくつかある。私としては中世以来の海洋国家として「敬意」を込めて、すべて「琉球」としたかった。当初は題名を「沖縄のこと」と命名したが「琉球のこと」と書き改めてその気持ちを表した。

#### 引用文献

- 池田博明 2015. オニグモの糸の強度と体重「飛行石のなぞ」撮影記録. 東京蜘蛛談話会通信, (145): 10–16.
- 新海明 1986. 沖縄クモ観察記. *Kishidaia*, (54): 1–9.
- 新海明 1998a. 沖縄クモ観察記 (3). *Kishidaia*, (73): 7–11.
- 新海明 1998b. 落葉落枝に支えられた円網の記録. *Kishidaia*, (75): 21–23.
- 新海明・新海栄一 1996. ソメワケトリノフンダマシの卵のうの観察. *Kishidaia*, (70): 63.
- 新海明・谷川明男 2001. ツシマトリノフンダマシの卵のうの記録. *Kishidaia*, (81): 41.
- 新海明・谷川明男 2010. 高野先生は見ていた ~シロオビトリノフンダマシの卵のう. *しのびぐも*, (37): 8–10.
- 谷川明男 2009. かつてにシロオビトリノフンダマシ. *しのびぐも*, (36): 1–4.
- Tanikawa, A. 2013. Two new species of the genus *Cyrtarachne* (Aranea:Araneidae) from Japan hitherto identified as *C. inaequalis*. *Acta arachnol.*, 62(2): 93–101.

## ナカムラオニグモの1採集記録

飯森 槻丞

私は 2024 年，大阪府豊能郡豊能町でナカムラオニグモを採集している．豊能町でナカムラオニグモは既に記録されており，初記録ではないものの，公表しておく．

1♀，大阪府豊能郡豊能町余野，7-IX-2024，飯森槻丞採集．

コンビニエンスストアの窓枠にいたものを採集した．



図 1. 採集したナカムラオニグモ♀とその外雌器（外雌器は加村隆英博士撮影）．

末筆ながら，くものいとへの投稿を快諾いただき，記録の文献をご教示，同定の確認および外雌器の撮影を行っていただいた加村隆英博士にお礼申し上げます．

### 参考文献

関西クモ研究会 2015. 関西クモ研究会採集会の記録（2014年度）. くものいと，48: 18–20.  
新海栄一 2017. 日本のクモ（増補改訂版）. 文一総合出版.

## 兵庫県南部の酒蔵施設におけるヒトエグモの生息事例

辻 雄 介

### はじめに

ヒトエグモ *Plator nipponicus* (Kishida 1914) は、ヒトエグモ科 Trochanteriidae に属する、体長 5–8 mm の扁平な体をもつ徘徊性のクモ類である (池田ほか 2017)。日本と韓国に分布し、日本では本州 (滋賀県, 和歌山県, 京都府, 大阪府, 奈良県, 兵庫県, 静岡県) で記録されているが (楠井 2008, 吉田・加村 2015, 河瀬 2017), 採集例は少ない (吉田・加村 2015)。5 府県 (京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山) のレッドデータブックやレッドリストに掲載されており (NPO 法人 野生生物調査協会・NPO 法人 Envision 環境保全事務所 2025), 兵庫県では A ランク (=絶滅危惧 I 類) に選定されている (本庄 2017)。

本種は屋内性の種と考えられており, 寺院や旧家などの古い建造物からの記録が多い (新海 2006)。一方で, 石灯籠や樹皮下, 瓦積みなどの屋外環境からも複数の発見例が報告されており (牧野 1999, 藤野 2017, 河瀬 2019), 建造物や人工物に由来する隙間環境を好んで利用することが知られている。このように人工的な環境に広く出現するにもかかわらず, 多くの人工構造物を有する事業施設からの報告はほとんどない。これは, 事業施設が私有地であり, 調査の機会が限られていることが一因と考えられる。

本報では, 兵庫県南部の酒造会社の協力のもと施設内の調査を行った結果, ヒトエグモの生息を確認した。稼働中の事業施設における生息事例として報告する。

### 方法

2025 年 6–11 月に, 兵庫県南部の酒造会社に勤務する Y 氏より, 勤務中に発見されたヒトエグモの出現記録および標本の提供を受けた。また, 2025 年 8 月 25 日 10–11 時に, Y 氏と筆者により現地調査を実施した。得られた標本の一部は兵庫県立人と自然の博物館に収蔵されている。これらの観察・採集例については「日付, 場所, 発見者, 個体数」を整理して表に示した。

調査地である酒造会社は古い建造物に増築を重ねる形で構成されており, 本報では増築部分およびその周辺を対象に, ヒトエグモの観察や採集を行った。

なお, 調査地である酒造会社の御意向により, 調査地名は「兵庫県南部」とし, 従業員名はイニシャル表記とすることで特定を防ぐよう配慮した。

### 酒蔵におけるヒトエグモの確認事例

本酒造施設の調査地内におけるヒトエグモの確認例は合計 12 例であった (表 1, 図 1–3)。このうち屋内での確認が 8 例, 屋外での確認が 4 例であり, 屋内での出現頻度が高かった。屋内では, 作業場および倉庫の壁際に置かれた木材やダンボールの下な

表 1. 兵庫県南部の酒蔵施設におけるヒトエグモの確認記録 (2025 年)

No.	確認日			確認環境		確認者	個体数	備考
	年	月	日	屋内・屋外	具体的な場所			
1	2025	5	12	屋外	作業場の外、木質パレットの隙間。	Y氏	成体:1, 脱皮殻:1	成体を採集。人と自然の博物館に収蔵。
2	2025	5	13	屋外	作業場の外、木材の下。	Y氏	幼体:1	
3	2025	5	13	屋外	酒蔵の外壁。	Y氏	成体:2	
4	2025	5	13	屋内	作業場の壁際、木材の下。	Y氏	幼体:1	
5	2025	5	16	屋外	作業場の外、木質パレットの隙間。	Y氏	成体(死体):1	
6	2025	5	20	屋内	作業場の壁際、木材の下。	Y氏	幼体:1	
7	2025	8	25	屋外	作業場の外、木質パレットの隙間。	Y氏・辻	成体:1	採集。辻保管。
8	2025	8	25	屋内	作業場の壁際、木材の下。	Y氏・辻	幼体:1, 脱皮殻:1	
9	2025	8	25	屋内	倉庫。壁際に置かれた木材の下。	Y氏・辻	脱皮殻:1	
10	2025	9	8	屋内	作業場の壁際、段ボールの下。	Y氏	成体:1	
11	2025	9	8	屋内	作業場の壁、黒板の裏。	Y氏同僚	卵囊:1	
12	2025	11	13	屋内	作業場の壁際、ネズミ用粘着トラップ。	Y氏	成体(死体):1	



図 1. 酒蔵施設内で確認されたヒトエグモの生態写真. a: 屋外に置かれた木質パレットの隙間で確認された成体 [表 1, No. 7]. b: 屋内に置かれたネズミ用粘着トラップで死亡していた成体 [表 1, No. 12]. c: 屋外に置かれた木材下で確認された幼体 [表 1, No. 2]. d: 屋内に置かれた段ボールに産卵された卵囊 [表 1, No. 11]. なお, a については筆者が撮影し, a 以外については Y 氏が撮影した写真を使用した.



図 2. 酒蔵施設におけるヒトエグモの確認環境. a: 作業場の外に置かれていた木質パレット. b: 作業場の外に置かれていた木材. c: 屋内の壁際木枠部に置かれていた木材. d: 倉庫内の壁際木枠部に置かれていた木材. なお, b については Y 氏が撮影し, b 以外については筆者が撮影した写真を使用した.

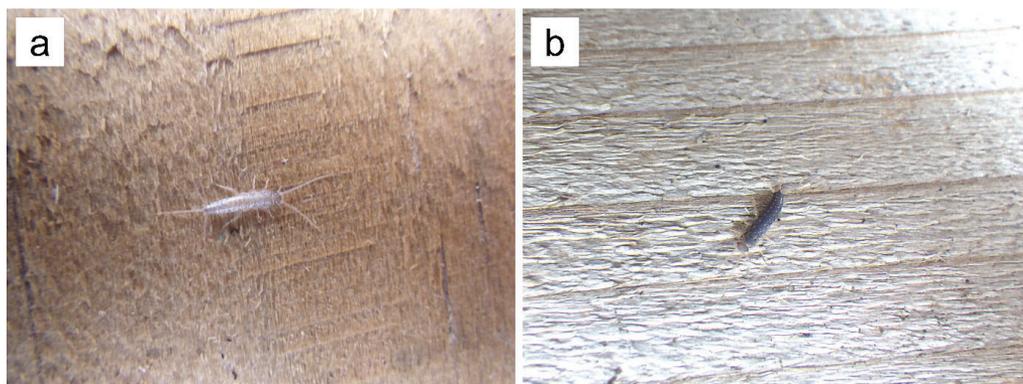


図 3. 酒蔵施設でヒトエグモと同所的に確認されたシミ目昆虫.

ど、人の往来が比較的少ない場所で観察され、成体、幼体、卵囊といった幅広い発育段階が確認された。卵囊については、藤野 (2024) に示されたヒトエグモの卵囊と形状が一致していたことから、本種のもつと判断した。また、屋内で害獣対策として設置されていた粘着トラップに本種成体が捕獲された例が 1 件あった。このことは、屋内や各種施設で広く設置されている粘着トラップを精査することで、本種の生息を把握できる可能性を示唆する。

一方、屋外では、作業場外の木質パレットの隙間や酒蔵外壁で成体・幼体・脱皮殻が確認された。これらはいずれも屋内の確認地点に近接しており、屋外での出現は屋内個体が周辺へ移動した結果と考えられる。このことから、本施設における主要な生息場所は屋内であると推定される。また、ヒトエグモは昼間に隙間へ潜むとされているが (池田ほか, 2017)、本調査では日中に外壁で静止していた個体も観察された。

調査期間は短かったものの、卵囊から成体までの幅広い発育段階が確認されたことから (図 1)、本種は一時的な移入による偶発的な出現ではなく、当該施設内において定着しているものと考えられる。本種の酒蔵施設からの生息記録は、公表されているものとしてはこれまでに知られておらず、今後、各地の酒蔵施設で同様の調査が行われることで、新たな生息地の発見が期待される。

調査地である酒蔵は、現在も稼働中の民間企業の敷地内に立地しており、コア事業である酒造りの継続によって建造物が保存されてきた。その結果、兵庫県版レッドリスト 2017 で絶滅危惧種に選定されているヒトエグモの生息環境が (本庄 2017)、非意図的ではあるものの事業活動の継続を通じて保全されてきたことになる。こうした事例は、地域産業が生物多様性の保全に寄与し得ることを示す一例と考えられる。

本観察例は古い建築物そのものではなく、その増築部分において確認されたものである。これまで蓄積されてきた多くの先行研究から、古い建造物が本種にとって好適な生息環境であることは明らかであるが、必ずしもそれに依存していない可能性を示唆される。河瀬 (2019) が指摘する「古いということが生息条件ではなく、移動する機会があり、移動後に生息する適度な隙間等の生息環境が存在すれば、ヒトエグモは比較的容易に新たな場所に定着する可能性を示している」という見解とも整合しており、本報の結果はこの見解を支持するものである。

観察されたすべての地点で昆虫綱のシミ目 *Zygentoma* が多数確認された (図 3)。シミ目は扁平な体をもち狭い隙間を利用する点で (山野 2012)、ヒトエグモと生息環境が重なる。ヒトエグモは小型昆虫やクモを捕食することが知られていることから (池田 2017, 藤野 2020)、本施設では同所的に見られるシミ目昆虫を主要な餌として利用している可能性が高い。今後、直接観察による検証が望まれる。

## 謝辞

現地調査および調査結果の公表についてご快諾くださった、匿名の酒造会社の代表者ならびに Y 氏をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。併せて、ヒトエグモの標本収蔵の際にご配慮いただいた、兵庫県立大学自然・環境科学研究所／兵庫県立

人と自然の博物館の山崎健史氏および徳島県立博物館の鈴木佑弥氏に厚くお礼を申し上げます。

## 引用文献

- 藤野義人 2017. 京都府京都市におけるヒトエグモの生息分布調査. くものいと, (50): 48–51.
- 藤野義人 2020. ヒトエグモの生態的知見. Kishidaia, (116): 24–33.
- 藤野義人 2024. ヒトエグモの生息分布調査 4 (生息確認地の追加記録). くものいと, (57): 12–14.
- 本庄二郎 2017. 兵庫県版レッドリスト 2017 (哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類) : ヒトエグモ. [https://www.kankyo.pref.hyogo.lg.jp/jp/environment/leg\\_240/leg\\_289/leg\\_6089](https://www.kankyo.pref.hyogo.lg.jp/jp/environment/leg_240/leg_289/leg_6089). アクセス日: 2025/11/7.
- 池田博明・仲條竜太・初芝伸吾・甲野涼 2017. クモ基本 60 改訂版. 東京蜘蛛談話会, 143 pp.
- 河瀬直幹 2017. 滋賀県におけるヒトエグモ発見と新聞等を通じた市民からの情報収集. くものいと, (50): 52–55.
- 河瀬直幹 2019. 滋賀県のヒトエグモ追加記録と生息環境に関する興味深い情報. くものいと, (52): 7–9.
- 楠井善久 2008. ヒトエグモの和歌山県湯浅町における分布記録. 南紀生物, 50 (1): 163–164.
- 牧野達也 1999. 蜘蛛礁計画. くものいと, (25): 12–20.
- NPO 法人 野生生物調査協会・NPO 法人 Envision 環境保全事務所 2025. ヒトエグモ. <https://jpnrdp.com/database/taxon/search/?o=&f=%E3%83%92%E3%83%88%E3%82%A8%E3%82%B0%E3%83%A2>. アクセス日: 2025/11/7.
- 新海栄一 2006. ネイチャーガイド 日本のクモ. 文一総合出版, 東京, 335 pp.
- 山野勝次 2012. 昆虫学講座 (第 6 回) シミ目・チャタテムシ目・チョウ目. 文化財の虫菌害, (63): 9–15.
- 吉田真・加村隆英 2015. 京都府レッドデータブック 2015 ヒトエグモ. <https://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/bio/db/spi0005.html>. アクセス日: 2025/11/7.

## 別府隆守氏収集の高知県産ザトウムシ目標本

辻 雄 介

(株式会社相愛：高知県高知市重倉 266-2)

筆者は、高知県在住の別府隆守氏より、高知県産を主とするザトウムシ目 *Opiliones* 標本の恵与を受けた。これらの標本は、当該地域における本グループの分布状況を把握するための基礎資料として重要であると考えられることから、種までの同定を行った高知県産標本について、以下に報告する。

### 標本データ

各種の標本データについて「個体数、採集地名、採集日、採集者」の順で示す。採集地名は原則としてラベルに記載されていた情報をそのまま用いたが、市町村合併により名称が変更されている場合のみ、括弧内に現在の市町村名を併記した。同定は筆者が行い、標本は株式会社相愛で保管している。1992–1999 年の標本は乾燥標本、2000 年以降の標本は液浸標本である。備考がある場合は、標本データの下に記載した。

アカザトウムシ亜目 *Laniatores*  
カマアカザトウムシ科 *Epedanidae*

オオアカザトウムシ *Epedanellus tuberculatus* Roewer 1911

2♀, 土佐清水市 今ノ山, 2.X.1999, 別府隆守; 1♂, 西土佐村 (現 四万十市) 黒尊, 1.V.1999, 別府隆守; 1♂, 春野町 (現 高知市春野町) 荒倉洞, 18.X.1997, 別府隆守.

ニホンアカザトウムシ *Pseudobiantes japonicus* Hirst 1911

1♂, 越知町 横倉山, 12.IV.1992, 別府隆守; 1♂, 高知市 オオナロ園, 6.VI.1992, 別府隆守; 1♀, 春野町弘岡上 (現 高知市春野町弘岡上), 17.V.1992, 別府隆守; 1♀, 土佐清水市 白皇山, 25.IV.1999, 別府隆守; 1♀, 土佐清水市 今ノ山, 2.X.1999, 別府隆守.

カイキザトウムシ亜目 *Eupnoi*  
マザトウムシ科 *Phalangiidae*

ゴホントゲザトウムシ *Himalphalangium spinulatum* (Roewer 1911)

1♂1♀ (図 1), 中村市 (現 四万十市) 入田, 1.VII.1995, 別府隆守.

備考：これまで高知県からは正式な報告が無かった種で (辻・辻 2023), 本報が具体的なデータを伴った高知県からの初めての記録となる。



図 1. 高知県四万十市産ゴホントゲザトウムシの標本写真 (乾燥標本).

トゲザトウムシ *Odiellus aspersus* (Karsch 1881)

1♀, 津野町 天狗高原, 18.IX.2021, 別府隆守.

カワザトウムシ科 Sclerosomatidae

オオヒラタザトウムシ *Pseudoliobunum japonense japonicum* (Roewer 1957)

1♀, 大豊町 京柱峠, 27.VI.1992, 別府隆守; 1♀, 中村市 (現 四万十市) 大島, 1.VII.1995, 別府隆守; 1♀, 中村市 (現 四万十市) 間, 2.VII.1995, 別府隆守; 1♀, 西土佐村 (現 四万十市) 黒尊, 1.V.1999, 別府隆守; 1♂, いの町 予佐越峠,

22.VII.2021, 別府隆守; 3♀, 香美市物部 白髪山登山口, 1.VIII.2021, 別府隆守; 1♂, 大豊町 梶が森, 20.V.2023, 前田蛭太; 1♀, いの町寺川 キャンプ場, 15.VI.2024, 別府隆守.

備考: 最近の分類学的再検討により, 従来使用されていた *Leiobunum* 属から *Pseudoleiobunum* 属へ移された (Tan *et al.* 2025a, b).

クロザトウムシ *Gagrellula* sp.

1♀, 香美市物部 別府峡もみじ茶屋, 4.IX.2021, 別府隆守.

備考: 四国地方から知られている未記載種. 体全体が黒く, 頭胸部の眼丘の両側にわずかに明褐色の斑紋をもつことで本種と同定した (鶴崎 2000).

イラカザトウムシ *Gagrellopsis nodulifera* Sato & Suzuki 1939

1♀, 大豊町 梶が森, 20.V.2023, 別府隆守.

ヒコナミザトウムシ *Nelima nigricoxa* Sato & Suzuki 1939

1♀, 香美市物部 別府峡, 31.VII.2021, 別府隆守; 1♀, 津野町 天狗高原, 18.IX.2021, 別府隆守.

## まとめ

本報では, 1992 年から 2024 年にかけて高知県内で別府氏が採集・収集した 2 亜目 3 科 8 種のザトウムシ目標本を記録した. これらの標本は, 高知県におけるザトウムシ目の分布状況やその変遷を把握するうえでの基礎資料として重要である.

記録した標本のうち, ゴホントゲザトウムシについては, 筆者の知る限り, 高知県から具体的なデータに基づく文献記録が確認できず (辻・辻 2023), 本報が県内における初めての記録になるものと考えられる. 本種は, 開発の影響を受けやすい人里近くの竹林や雑木林などに生息しており, 消失した生息地も知られている (鶴崎 2014). 本報で記録した標本 (1995 年採集) が採集されてから, 約 30 年が経過しているため, 現在の生息状況については再確認が望まれる.

## 謝辞

貴重な標本を恵与いただいた別府隆守氏 (高知県高知市) ならびに文献を恵与いただいた鶴崎展巨氏 (鳥取県鳥取市) に厚くお礼を申し上げます.

## 引用文献

Tan, D. K. T., Tsurusaki, N., Fong, J. J. & Zhang, C. 2025a. Reinstatement of the genus *Pseudoleiobunum* Müller, 1914 with the inclusion of a new species from Hong Kong and reallocation of the *Leiobunum maximum* species complex (Arachnida: Opiliones: Eupnoi:

Sclerosomatidae). *Zootaxa*, 5646(3), 301–343.

Tan, D. K. T., Tsurusaki, N., Fong, J. J. & Zhang, C. 2025b. Erratum: Reinstatement of the genus *Pseudoleiobunum* Müller, 1914 with the inclusion of a new species from Hong Kong and reallocation of the *Leiobunum maximum* species complex (Arachnida: Opiliones: Eupnoi: Sclerosomatidae). *Zootaxa*, 5659(4), 599–600.

辻雄介・辻春香 2023. 横倉山（高知県）周辺におけるザトウムシ目の記録. 四国自然史科学研究, (16): 49–55.

鶴崎展巨 2000. 小田深山とその周辺のザトウムシ. 小田深山の自然, (1): 671–683.

鶴崎展巨 2014. クモガタ類・多足類, pp. 237–250. In: 愛媛県貴重野生動物検討委員会（編）愛媛県レッドデータブック 2014 —愛媛県の絶滅のおそれのある野生生物—. 県民環境部環境局自然保護課, 623 pp.

## 京都府におけるキノボリコモリグモの記録

加 村 隆 英

キノボリコモリグモ *Hogna trunca* Yin, Bao & Zhang 1996 は、中国浙江省で採集された標本に基づいて記載された種で、日本国内では奈良県と沖縄県の2か所のみで発見されている (Shida 2022)。このたび、京都府内で本種が発見されたので、国内3番目の記録として報告する。

この情報は、京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所の邊見由美氏からご提供いただいた。同実験所構内で学生が発見したとのことで、生時の写真と共に標本(雌2個体)を借りることができた。雌の生殖器を観たところ、本種の原因記載や国内における本種の最初の発見者である信太理央氏の著作 (Shida 2022) に示されている図とは、わずかな差異が認められたため、信太氏に写真を送って、ご意見を伺った。その結果、中国(原記載)、奈良県、沖縄県の個体間で、雄の触肢では形態にほとんど差異がないものの、雌の生殖器では違いが見られ、これは地域的な変異と判断されるので、今回の京都府産の個体も本種と同定することが妥当である、とのお返事をいただいた。

今回確認された記録は以下のとおりである。1♂, 2022年5月7日; 1♀, 2023年6月12日; 2♀, 2023年6月14日(筆者が借り受けた標本)。採集場所はすべて京都府舞鶴市長浜番外地 京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所構内 (35°29'20.4"N 135°22'03.0"E), 採集者はすべて史翔寿氏である。

本種は比較的大型の種(体長:雌14~22mm, 雄13~16mm)で、コモリグモとしては珍しく樹上で生活する (Yin, Bao & Zhang 1996, Shida 2022)。日本国内で、このような大型種が最近まで知られていなかったことは不思議と言うほかはない。樹上性であることから、アシダカグモ類やハシリグモ類と誤認されていたのかもしれないが、外来種の可能性もある。今後、国内における分布状況に注意を払うべき種である。

### 謝辞

今回の報告にあたって、京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所の邊見由美氏と史翔寿氏には、たいへんお世話になった。筆者からの問い合わせに親切にお答えいただき、貴重な写真と標本を貸して下さったことに心から感謝申し上げます。また、本種の同定に関してご助言をいただいた信太理央氏(九州大学大学院地球社会統合科学府)、邊見氏と筆者のやり取りを仲介して下さった岩崎敬二氏(奈良大学文学部地理学科)と平井規央氏(大阪公立大学大学院農学研究科)に厚くお礼申し上げます。

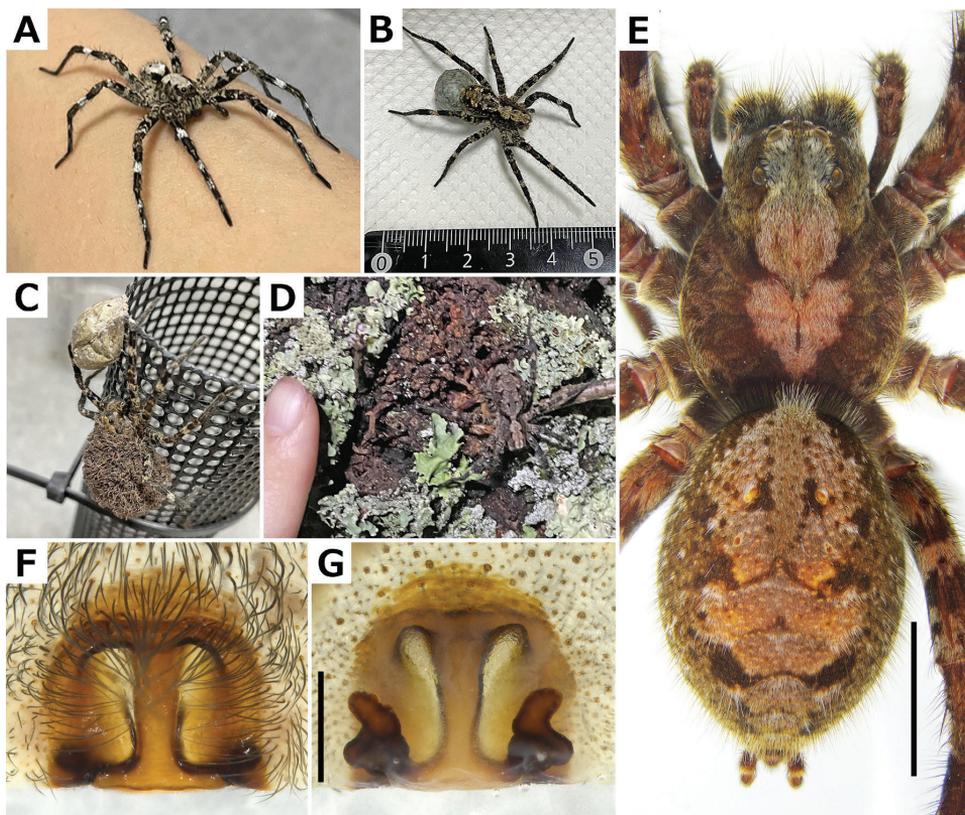


図 1. 京都府舞鶴市で採集されたキノボリコモリグモ. A, 雄 (2022年5月7日採集, 撮影); B, 卵嚢を保持する雌 (2023年6月12日 採集, 翌13日撮影); C, 子グモを保護する雌 (Bと同じ個体, 2023年7月6日撮影); D, 桜の幹の上で観察された雌 (2023年6月14日撮影); E, 雌 (標本, 2023年6月14日採集); F, 雌の外部生殖器 (同); G, 雌の内部生殖器 (同). A-Dは史翔寿氏撮影. スケール=5 mm (E); 0.5 mm (F-G).

## 文献

Shida, R. 2022. First records of the arboreal wolf spider species *Hogna trunca* Yin, Bao & Zhang 1996 (Araneae: Lycosidae) from Japan. *Acta Arachnologica*, 71: 129–133.

Yin, C., Bao, Y. & Zhang, Y. 1996. On two new species of wolf spiders from Zhejiang Province (Araneae: Lycosidae). *Acta Arachnologica Sinica*, 5: 5–9.

## 座間味島で採集されたクモ

加村 隆 英

Spiders collected from Zamamijima Island, Nansei Islands, Japan

Takahide Kamura

座間味島は、沖縄島南部の西に位置する慶良間諸島を構成する島のひとつである。筆者は 2025 年 4 月に、この島でクモを採集したので、その同定結果を示す。

採集場所は次のとおりである。座間味（座間味港付近及び古座間味ビーチ付近）、阿佐（チシ展望台～ユヒナの浜）、阿真（阿真ビーチ付近）。採集方法はシフティングを基本として、地表以外に生息する種は目についたものを採集した。同定はすべて筆者による。科の配列は谷川（2025）に従った。Japan Spider Catalog（2025）のデータに照らして、座間味島の新記録と見なされる種にアスタリスクを付した。

### タマゴグモ科

\**Ischnothyreus peltifer* (Simon 1892) ハワイヨロイダニグモ 3♀, 阿真, 25.IV.2025. (図 1A–B)

\**Opopaea cornuta* Yin & Wang 1984 トゲムネシャラクダニグモ, 1♀4♂, 阿真, 25.IV.2025. (図 1C–G)

\**Xestaspis parmata* Thorell 1890 ネットタイダニグモ 1♂, 阿真, 25.IV.2025.

### コガネグモ科

*Cyclosa confusa* Bösenberg & Strand 1906 ミナミノシマゴミグモ 1♀, 阿佐, 24.IV.2025.

*Cyclosa mulmeinensis* (Thorell 1887) トゲゴミグモ 1♀, 座間味港付近, 23.IV.2025.

*Neoscona subpullata* (Bösenberg & Strand 1906) ヘリジロオニグモ 1♀, 座間味港付近, 23.IV.2025.

*Neoscona theisi* (Walckenaer 1842) ホシスジオニグモ 1♀, 座間味港付近, 23.IV.2025.

*Thelacantha brevispina* (Doleschall 1857) チブサトゲグモ 1♀幼, 座間味港付近, 23.IV.2025.

### ウズグモ科

\**Octonoba okinawensis* Yoshida 1981 オキナワウズグモ 1♂, 阿真, 25.IV.2025.

### コモリグモ科

*Pardosa laevitarsis* Tanaka & Suwa 1986 タテスジハリゲコモリグモ 3♀, 阿佐, 24.IV.2025.

\**Trochosa aquatica* Tanaka 1985 ナガズキンコモリグモ 1♀2♂, 古座間味ビーチ付近, 23.IV.2025; 1♀1♂, 阿佐, 24.IV.2025; 1♀2♂, 阿真, 25.IV.2025.

\**Wadicosa okinawensis* (Tanaka 1985) リュウキュウコモリグモ 3♀, 阿佐, 24.IV.2025.  
ウラシマグモ科

\**Grandilithus lynx* (Kamura 1994) ヤマネコウラシマグモ 4♀, 阿佐, 24.IV.2025; 5♀,  
阿真, 25.IV.2025.

ワシグモ科

\**Zelotes asiaticus* (Bösenberg & Strand 1906) クロチャケムリグモ 5♀1♂, 古座間味ビ  
ーチ付近, 23.IV.2025.

ハエトリグモ科

\**Hasarius adansoni* (Audouin 1826) アダンソンハエトリ 1♂幼, 古座間味ビーチ付近,

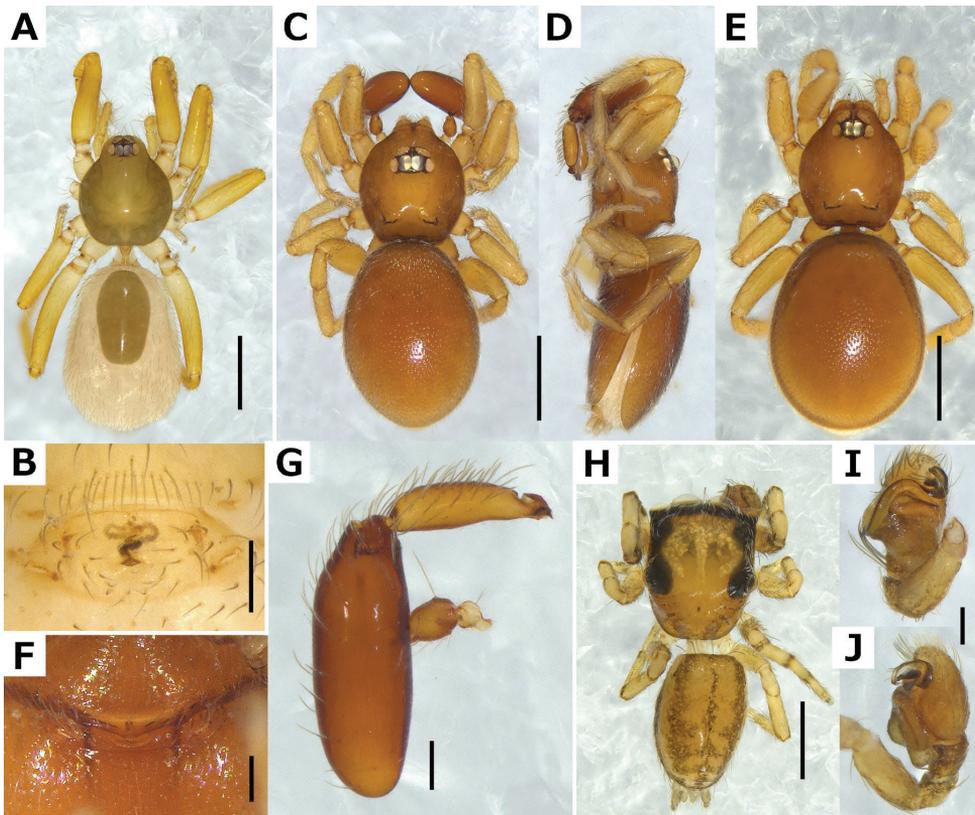


図 1. 座間味島で採集されたクモ 3 種. A-B, *Ischnothyreus peltifer* (Simon 1892) ハワイ  
ヨロイダニグモ (A, ♀背面; B, ♀生殖器, 腹面); C-G, *Opopaea cornuta* Yin & Wang  
1984 トゲムネシャラクダニグモ (C, ♂背面; D, ♂側面; E, ♀背面; F, ♀生殖器, 腹  
面; G, ♂触肢, 前側面); H-I, *Neon ningyo* Ikeda 1995 ニンギョウネオンハエトリ (H,  
♂背面; I, ♂触肢, 腹面; J, 同, 後側面). スケール = 0.5 mm (A, C-E, H); 0.1 mm (B, F-  
G, I-J).

23.IV.2025; 1♀1♂幼, 阿真, 25.IV.2025.

\**Neon ningyo* Ikeda 1995 ニンギョウネオンハエトリ 1♂, 阿佐, 24.IV.2025. (図 1H-J)

\**Plexippus paykulli* (Audouin 1826) チャスジハエトリ 1♀幼, 阿佐, 24.IV.2025.

## 文献

Japan Spider Catalog (2025). Japan Spider Catalog ver. 1.1.4. online at <https://lookerstudio.google.com/reporting/affa70b1-2b26-4da6-b0ba-12c8cb5873b5> (閲覧日: 2026年1月20日).

谷川明男 2025. 日本産クモ類目録 ver. 2025 R5. <https://www.asahi-net.or.jp/~dp7a-tknw/japan.pdf>



# クモが円網の中心で下を向いているのは逃げるため

西川喜朗

円網を張るクモが網の中心で下向きに止まっているのは何故か？ これについては、上に移動するよりも下に移動するほうが速いので、餌の捕獲効率が高い、という説明がされることが多い。

ただ、私は、話はもっと単純なのではないか、と思っている。クモが下向きに止まっているのは、それが餌を待ちながらも不意に現れた外敵からいち早く逃げることができる体勢だからである。円網は、餌を捕るためのものであるが、クモは餌を捕ること、つまり食うことよりも、敵から逃げることに、つまり命を守ることにずっと大切である。同じように円網を張っていても、近くの枝や葉に身を潜めているクモ（種や属）も多い。これも外敵から身を守る工夫であろう。仮に餌を捕らえることに失敗しても、次の機会はまたやって来るが、突然襲ってくる敵から逃げることに失敗はゆるされない。

敵から逃げるには、下に落ちるのがもっとも確実であり、そのためには上向きの姿勢は適さないのだろうと考えられる。

## 関西クモ研究会 2025 年度 採集会の記録 (滋賀県長浜市西浅井町 山門水源の森)

2025 年度の採集会は 5 月 25 日に「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」の協力を得て、山門水源の森（滋賀県長浜市西浅井町）において実施された。

参加者：安達郁子，安達利道，渥美大輔，荒川真，池田浩，伊藤孝子，伊藤博，牛島 稔広，宇城徳七，大関佑弥，加藤修朗，加村隆英，川合あき，熊田憲一，佐々木善英，関根幹夫，中内恵理子，萩野典子，原口岳，松本吏樹郎，三永權志，三永芳郎（敬称略）。



図 1. 採集会の参加者（撮影：伊藤博氏）。

山門水源の森のクモ類については，吉田ら（2012，2014，2017）による詳細な報告があり，2019 年には関西クモ研究会の採集会が同地で実施されている（関西クモ研究会 2020）．最初の調査から 10 年以上が経過し，その間に，シカによる食害やナラ枯れなどによって森林環境が変化していることもあり，もう一度調査を行うことが計画された．

参加者によって採集された標本は，大関佑弥，加藤修朗，熊田憲一，萩野典子，三永權志の各氏及び加村隆英が同定した．加村の同定した標本は，荒川真，牛島稔広，

関根幹夫, 原口岳, 松本吏樹郎の各氏及び加村の採集による.

また, 加藤, 熊田, 萩野の3氏が, 6月17日に同地で追加の調査を行い, その同定結果を知らせてくださったので, あわせて報告する.

確認されたクモは下記のとおりである. 同定者及び日付ごとに, 個体数と雌雄及び成体・幼体の別を示した(ただし, 一部のデータでは個体数が明記されていない). また, 熊田氏の6月17日のデータについては, 採集地が「北部湿原」と「四季の森」に分けられているので, それぞれを「a」, 「b」として区別した(採集場所の詳細は, 吉田ら(2014, 2017)を参照). 記号の意味は, 次のとおり:F, 雌成体; f, 雌幼体; M, 雄成体; m, 雄幼体; y, 雌雄が区別できない幼体. 科の配列は谷川(2025)に従った.

### タマゴグモ科

*Orchestina sanguinea* Oi 1955 アカハネグモ 1F(加藤 6/17), 1F(熊田 6/17b), 1F(萩野 5/25).

### ユウレイグモ科

*Pholcus crypticolens* Bösenberg & Strand 1906 ユウレイグモ 3y(加村 5/25), y(三永 5/25).

### ヒメグモ科

*Anelosimus crassipes* (Bösenberg & Strand 1906) アシプトヒメグモ 2M(加村 5/25), 1F(萩野 6/17).

*Argyrodes bonadea* (Karsch 1881) シロカネイソウロウグモ 2y(萩野 5/25).

*Ariamnes cylindrogaster* Simon 1889 オナガグモ 1F(熊田 5/25).

*Asiopsisinus nubilus* (Yaginuma 1960) ムラクモヒシガタグモ 1m1y(加藤 6/17).

*Chrosiothes sudabides* (Bösenberg & Strand 1906) ヨツコブヒメグモ 1M(熊田 6/17a).

*Chrysofoliata* (L.Koch 1878) ホシミドリヒメグモ 1F(加藤 5/25).

*Episinus affinis* Bösenberg & Strand 1906 ヒシガタグモ 1F(加藤 5/25), 1F(加村 5/25), 1M(熊田 6/17a), 2y(萩野 5/25), 1y(萩野 6/17).

*Lasaeola castrata* (Bösenberg & Strand 1906) ボカシミジングモ 1M(加藤 5/25), 1y(熊田 5/25), 1F3f1M(熊田 6/17a), 1F11f1M2m(熊田 6/17b), 2M(萩野 6/17).

*Lasaeola mutilata* (Bösenberg & Strand 1906) コアカクロミジングモ 1F(大関 5/25), 4F(加藤 6/17), 1F(熊田 6/17a), 1F(熊田 6/17b), 1F1M(萩野 6/17).

*Neospintharus fur* (Bösenberg & Strand 1906) フタオイソウロウグモ 2f(萩野 5/25).

*Nihonhimea japonica* (Bösenberg & Strand 1906) ニホンヒメグモ 1F1m1y(加藤 6/17).

*Parasteatoda angulithorax* (Bösenberg & Strand 1906) ツリガネヒメグモ 1F(熊田 6/17b), 1y(萩野 5/25), 1y(萩野 6/17).

*Parasteatoda asiatica* (Bösenberg & Strand 1906) キヒメグモ 1F4f(熊田 6/17a).

*Parasteatoda culicivora* (Bösenberg & Strand 1906) カグヤヒメグモ 2f(熊田 6/17a), 7f4m(熊田 6/17b), 3m6y(萩野 6/17).

*Parasteatoda kompirensis* (Bösenberg & Strand 1906) コンピラヒメグモ 1f(熊田 6/17a), 1y(萩野 5/25), 7y(萩野 6/17).

- Phoroncidia altiventris* Yoshida 1985 ハラダカツクネグモ 1F2M (加村 5/25).  
*Phycosoma amamiense* (Yoshida 1985) アマミジジグモ 1M (加村 5/25).  
*Phycosoma flavomarginatum* (Bösenberg & Strand 1906) キベリミジジグモ 1m (加藤 5/25).  
*Phycosoma japonicum* (Yoshida 1985) ヤマトミジジグモ 1F4y (加藤 6/17), 1M2y (萩野 5/25), 3F1m (萩野 6/17).  
*Phycosoma mustelinum* (Simon 1889) カニミジジグモ M (大関 5/25), 1F1M (加藤 5/25), 1F (加藤 6/17), 1F (熊田 6/17b), 1F1M (萩野 5/25).  
*Platnickina maculata* (Yoshida 2001) ミナミホシヒメグモ 1F (加村 5/25).  
*Platnickina sterninotata* (Bösenberg & Strand 1906) ムナボシヒメグモ 7F1M1m3y (加藤 5/25), 3F1M (加藤 6/17), 2F1f (熊田 5/25), 2F (熊田 6/17a), 2F1M (熊田 6/17b), 9F1M1y (萩野 5/25).  
*Stemmops nipponicus* Yaginuma 1969 スネグロオチバヒメグモ 3M1m (萩野 5/25), 1F (萩野 6/17).

#### カラカラグモ科

- Wendilgarda nipponica* Shinkai 2009 ナルコグモ 1F (加藤 6/17).

#### ヨリメグモ科

- Comaroma maculosa* Oi 1960 ヨロイヒメグモ 2F (加藤 6/17), 1M (萩野 6/17).  
*Conculus lyugadinus* Kishida 1940 ヨリメグモ 1F (加藤 6/17).

#### コガネグモ科

- Alenatea acuiseta* (Zhu & Song 1994) オオクマヤミイロオニグモ 2F (加藤 5/25), F (三永 5/25).  
*Aoaraneus pentagrammicus* (Karsch 1879) アオオニグモ 1F (加村 5/25).  
*Araneus semilunaris* (Karsch 1879) マルツメオニグモ 1y (加藤 5/25), 1f (加村 5/25).  
*Araneus tsurusakii* Tanikawa 2001 カラオニグモ 2F (加藤 5/25), 1M (熊田 6/17a).  
*Argiope bruennichi* (Scopoli 1772) ナガコガネグモ 2y (熊田 6/17a), 1y (萩野 6/17).  
*Argiope minuta* Karsch 1879 コガタコガネグモ 3y (熊田 6/17a), 4y (熊田 6/17b).  
*Chorizopes nipponicus* Yaginuma 1963 ヤマトカナエグモ 1f (加村 5/25).  
*Cyclosa argenteoalba* Bösenberg & Strand 1906 ギンメッキゴミグモ 1M1F (加村 5/25), 1y (熊田 6/17b), 3m2y (萩野 6/17).  
*Cyclosa atrata* Bösenberg & Strand 1906 カラスゴミグモ 2F1M (熊田 6/17a), 1F1f (萩野 6/17).  
*Cyclosa laticauda* Bösenberg & Strand 1906 キジロゴミグモ y (大関 5/25).  
*Cyclosa octotuberculata* Karsch 1879 ゴミグモ 1m (萩野 5/25), FM (三永 5/25).  
*Cyrtarachne nagasakiensis* Strand 1918 シロオビトリノフンダマシ 1y (熊田 6/17a).  
*Gasteracantha kuhli* C. L. Koch 1837 トゲグモ 1f1m (加藤 6/17).  
*Neoscona adianta* (Walckenaer 1802) ドヨウオニグモ 5f1y (熊田 6/17a).  
*Neoscona mellottei* (Simon 1895) ワキグロサツマノミダマシ 1y (加藤 6/17), 10y (熊田 6/17a), 10y (熊田 6/17b), 4y (萩野 6/17).  
*Neoscona punctigera* (Doleschall 1857) コゲチャオニグモ 1y (熊田 6/17a).

*Neoscona scylloides* (Bösenberg & Strand 1906) サツマノミダマシ 1y (熊田 5/25), 2f (熊田 6/17a), 3y (萩野 5/25), 9y (萩野 6/17).

*Plebs astridae* (Strand 1917) サガオニグモ 1F (加藤 5/25).

*Plebs sachalinensis* (S. Saito 1934) カラフトオニグモ 2F (加藤 5/25), 1F (熊田 6/17b).

*Songaraneus ejusmodi* (Bösenberg & Strand 1906) ヌサオニグモ 1M (加藤 6/17).

*Trichonephila clavata* (L. Koch 1878) ジョロウグモ 1y (加藤 6/17), 5y (熊田 6/17a), 34y (熊田 6/17b).

### センシヨウグモ科

*Ero japonica* Bösenberg & Strand 1906 センシヨウグモ 1f (熊田 6/17a), 1F (熊田 6/17b).

### アシナガグモ科

*Leucauge celebesiana* (Walckenaer 1842) オオシロカネグモ 1F4M (加藤 6/17), 2F4f1M (熊田 6/17a), 1F1f (熊田 6/17b), 1f (萩野 6/17).

*Leucauge subblanda* Bösenberg & Strand 1906 コシロカネグモ 1F1f1M1m (熊田 6/17b).

*Leucauge subgemmea* Bösenberg & Strand 1906 キララシロカネグモ 1m (熊田 6/17a).

*Metellina ornata* (Tikuni 1955) キンヨウグモ 2y (熊田 6/17b).

*Metleucauge yunohamensis* (Bösenberg & Strand 1906) メガネドヨウグモ F (大関 5/25), 3F (加藤 5/25).

*Tetragnatha keyserlingi* Simon 1890 ヤサガタアシナガグモ 1f (加藤 5/25), 1F1M (加藤 6/17), 1F (熊田 6/17a).

*Tetragnatha praedonia* L. Koch 1878 アシナガグモ 2M (萩野 6/17), F (三永 5/25).

*Tetragnatha shinanoensis* Okuma & Chikuni 1978 シナノアシナガグモ 1M (加村 5/25).

*Tetragnatha squamata* Karsch 1879 ウロコアシナガグモ 1F1M1y (加藤 5/25).

*Tetragnatha yesoensis* S. Saito 1934 エゾアシナガグモ 1F5M (加村 5/25), 2m (熊田 5/25), 1F (熊田 6/17a), 2F (熊田 6/17b).

### サラグモ科

*Ainerigone saitoi* (Ono 1991) サイトウヌカグモ 1F (加藤 6/17), 1F (加村 5/25), 1F (萩野 6/17).

*Ketambea nigripectoris* (Oi 1960) ムネグロサラグモ 2F1M (加村 5/25), 1F (熊田 6/17b).

*Neriere japonica* (Oi 1960) ツリサラグモ 1F (熊田 6/17b).

*Nippononeta projecta* (Oi 1960) ツノケシグモ 2F (萩野 6/17).

*Nippononeta ungulata* (Oi 1960) ツメケシグモ 1F (萩野 6/17).

*Oia imadatei* (Oi 1964) イマダテテングヌカグモ 1F (萩野 6/17).

*Tmeticus neserigonoides* H.Saito & Ono 2001 ナンキンヌカグモ 1F (萩野 6/17).

*Turinyphia yunohamensis* (Bösenberg & Strand 1906) ユノハマサラグモ F (大関 5/25), 11F (加藤 5/25), 1F (加藤 6/17), 1F (加村 5/25), 1F (熊田 5/25), 9F1y (萩野 5/25), F (三永 5/25).

*Weintrauboa contortipes* (Karsch 1881) アシヨレグモ 1F (加村 5/25), F (三永 5/25).

## ウズグモ科

*Octonoba sybotides* (Bösenberg & Strand 1906) カタハリウズグモ 1F (萩野 6/17).

## タナグモ科

*Agelena silvatica* Oligier 1983 クサグモ 2y (加藤 5/25), 1y (加藤 6/17), 1f (熊田 5/25), 2f (熊田 6/17a), 2f1y (熊田 6/17b), 3y (萩野 5/25), 3y (萩野 6/17).

*Allagelena opulenta* (L. Koch 1878) コクサグモ 1y (加藤 5/25), 5y (熊田 6/17a), 1y (萩野 5/25), 1y (萩野 6/17).

*Tegeocoelotes corasides* (Bösenberg & Strand 1906) ヤマヤチグモ 1f (熊田 6/17b).

## コタナグモ科

*Cicurina japonica* (Simon 1886) コタナグモ 1y (萩野 6/17).

## アシダカグモ科

*Sinopoda forcipata* (Karsch 1881) コアシダカグモ f (三永 5/25).

## シボグモ科

*Anahita fauna* Karsch 1879 シボグモ 1y (加藤 6/17), 1F2y (萩野 6/17).

## キシダグモ科

*Pisaura lama* Bösenberg & Strand 1906 アズマキシダグモ 1F (熊田 5/25).

## ハシリグモ科

*Dolomedes raptor* Bösenberg & Strand 1906 アオグロハシリグモ y (大関 5/25), 13y (加藤 5/25), 3m7y (加藤 6/17), 2f (熊田 6/17a), 5f (熊田 6/17b), 8y (萩野 5/25), f (三永 5/25).

*Dolomedes sulfureus* L. Koch 1878 イオウイロハシリグモ 2y (加藤 6/17), 1y (加村 5/25).

## コモリグモ科

*Arctosa ipsa* (Karsch 1879) ヒノマルコモリグモ 1F (萩野 6/17).

*Pardosa laura* Karsch 1879 ハリゲコモリグモ 1M (萩野 5/25).

*Pirata piraticus* (Clerck 1757) カインゾクコモリグモ 1F3f1m (熊田 5/25), 2F (熊田 6/17a).

*Pirata subpiraticus* (Bösenberg & Strand 1906) キバラコモリグモ 1F (加村 5/25).

*Piratula procurva* (Bösenberg & Strand 1906) チビコモリグモ 1F1m (熊田 6/17a), 1M (熊田 6/17b), 8F9M1m (萩野 6/17).

## カニグモ科

*Diaea subdola* O. P.-Cambridge 1885 コハナグモ 2f (加藤 5/25), 5F1m (加藤 6/17), 1f (加村 5/25), 1M2m (熊田 5/25), 7F4f7M (熊田 6/17a), 1F1m (熊田 6/17b), 3m1y (萩野 5/25), 1F2M (萩野 6/17), f (三永 5/25).

*Oxytate striatipes* L. Koch 1878 ワカバグモ F (大関 5/25), 1M (加村 5/25), 2f (熊田 6/17a).

*Tmarus rimosus* Paik 1973 セマルトラフカニグモ 1f (加藤 5/25).

*Xysticus croceus* Fox 1937 ヤマイロカニグモ 1M (加藤 5/25), 3M (熊田 6/17a), 2M (萩野 5/25).

## フクログモ科

- Bucliona jucunda* (Karsch 1879) ヤハズフクログモ 1m3y (加藤 5/25).  
*Clubiona deletrix* O. P.-Cambridge 1885 マダラフクログモ 1f (加藤 5/25), 1y (萩野 5/25), 1y (萩野 6/17).  
*Clubiona diversa* O. P.-Cambridge 1862 ミチノクフクログモ 1F (熊田 6/17a), 1F (熊田 6/17b).  
*Clubiona inaensis* Hayashi 1989 イナフクログモ 2F1M (加藤 5/25), 1M (加村 5/25), 2F (熊田 6/17a), 1M (萩野 5/25), 1F (萩野 6/17).  
*Clubiona japonica* L. Koch 1878 ヤマトフクログモ 1F (加藤 5/25).  
*Clubiona kurosawai* Ono 1986 クロサワフクログモ 1F (加村 5/25).  
*Clubiona uenoi* Ono 1986 ウエノフクログモ 1F1M1m (加藤 6/17), 1F (熊田 6/17a).  
*Clubiona vigil* Karsch 1879 ムナアカフクログモ 1f2M (熊田 6/17a), 2f1y (熊田 6/17b).  
*Clubiona zilla* (Dönitz & Strand 1906) ウコンフクログモ 1F (加藤 5/25), 1M (加藤 6/17).

## イツツグモ科

- Anyphaena pugil* Karsch 1879 イツツグモ 5F (加藤 5/25), 2F (加村 5/25), 5F1E (萩野 5/25), F (三永 5/25).

## ネコグモ科

- Orthobula crucifera* Bösenberg & Strand 1906 オトヒメグモ 2F1M (萩野 6/17).  
*Trachelas japonicus* Bösenberg & Strand 1906 ネコグモ 2F (加藤 5/25), 1F (加藤 6/17), 1F (加村 5/25), 1F (萩野 5/25).

## ウラシマグモ科

- Corealithus coreanus* (Paik 1991) キレオビウラシマグモ 1f2m (熊田 6/17a), 1f (熊田 6/17b), 1M (萩野 5/25), 2F1M (萩野 6/17).  
*Pennalithus pennatus* (Yaginuma 1967) ヤバネウラシマグモ 1m (萩野 6/17).

## ワシグモ科

- Cladothela oculinotata* (Bösenberg & Strand 1906) チャクロワシグモ 1M (加村 5/25).  
*Gnaphosa kompirensis* Bösenberg & Strand 1906 メキリグモ 3M (萩野 6/17).  
*Kishidaia albimaculata* (S.Saito 1934) ヨツボシワシグモ 1F (加藤 6/17), 1F1f (熊田 6/17a), 1F (熊田 6/17b), 1f (萩野 6/17).  
*Odontodrassus hondoensis* (S. Saito 1939) ヤマトフトバワシグモ 1F2M (加藤 6/17), 1f1M (熊田 6/17b), 1F2M (萩野 6/17).  
*Sergiolus hosiziro* (Yaginuma 1960) ホシジロトンビグモ 1M (加村 5/25).  
*Zelotes asiaticus* (Bösenberg & Strand 1906) クロチャケムリグモ 1F (萩野 6/17).  
*Zelotes tortuosus* Kamura 1987 クロケムリグモ 1F (萩野 6/17).

## ツチフクログモ科

- Prochora praticola* (Bösenberg & Strand 1906) イタチグモ 4y (萩野 6/17).

## コマチグモ科

- Cheiracanthium eutittha* Bösenberg & Strand 1906 アシナガコマチグモ 1F (熊田 6/17b).

### エビグモ科

*Philodromus subaureolus* Bösenberg & Strand 1906 アサヒエビグモ 2f3m1y (加藤 5/25), 3F1M (加藤 6/17), 1f (加村 5/25), 3f (熊田 5/25), 2F (熊田 6/17a), 3F2f3M (熊田 6/17b), 2m1y (萩野 5/25).

*Tibellus japonicus* Efimik 1999 シャコグモ 1F (加藤 6/17), 2F2y (熊田 6/17a).

### ハエトリグモ科

*Asianellus festivus* (L. Koch 1834) ヤマジハエトリ 1f (熊田 6/17a).

*Evarcha albaria* (L. Koch 1878) マミジロハエトリ 1F(加藤 5/25), 2F1M(熊田 6/17a), 2f (熊田 6/17b), 1M (萩野 6/17).

*Helicium yaginumai* Bohdanowicz & Prószyński 1987 ジャバラハエトリ 1F2M (加藤 6/17), 3F (熊田 6/17a), 4F1M (熊田 6/17b).

*Marpissa pulla* (Karsch 1879) ヨダンハエトリ 1F1f1M1m (熊田 6/17a), 1y (萩野 6/17).

*Mendoza canestrinii* (Ninni 1868) オスクロハエトリ 1f (熊田 6/17a).

*Menemerus brachygnathus* (Thorell 1877) シラヒゲハエトリ 1F (萩野 6/17).

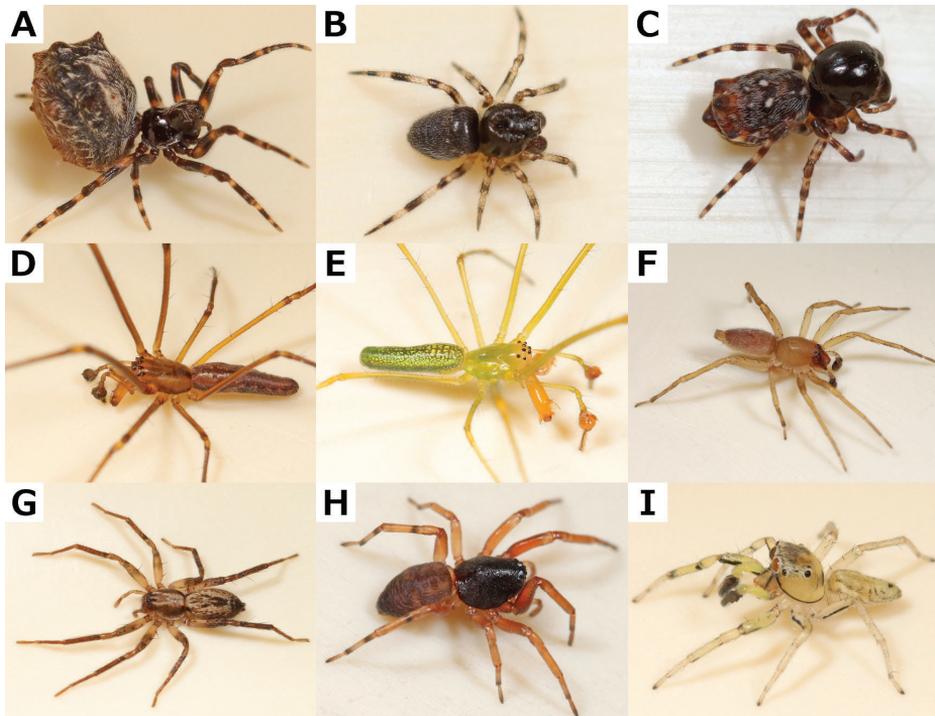


図 2. 滋賀県山門水源の森で観察されたクモ類. A, ハラダカツクネグモ♀; B, アマミミジグモ♂; C, ヤマトカナエグモ♀幼体; D, シナノアシナガグモ♂; E, エゾアシナガグモ♂; F, イナフクログモ♂; G, イツツグモ♀; H, ネコグモ♀; I, マガネアサヒハエトリ♂.

*Myrmarachne elongata* Szombathy 1915 ヤガタアリグモ 1F (萩野 5/25).  
*Myrmarachne inermichelis* Bösenberg & Strand 1906 ヤサアリグモ 1M (加藤 6/17),  
3F5f4M (熊田 6/17a), 1y (萩野 6/17).  
*Myrmarachne japonica* (Karsch 1879) アリグモ 1M (加藤 5/25), 1F (熊田 6/17b).  
*Orienticius vulpes* (Grube 1861) イナズマハエトリ 1M (熊田 6/17a).  
*Phintella arenicolor* (Grube 1861) マガネアサヒハエトリ 1F (加藤 6/17), 1M (加村  
5/25), 1F (熊田 5/25), 1M (熊田 6/17a), 1M (萩野 6/17).  
*Plexippoides doenitzi* (Karsch 1879) デーニッツハエトリ 1fly (加藤 5/25), 2y (加藤  
6/17), 1F (加村 5/25), 3f (熊田 6/17b), 2y (萩野 5/25), 1y (萩野 6/17).  
*Rhene atrata* (Karsch 1881) カラスハエトリ 1f1M (熊田 6/17a).  
*Siler cupreus* Simon 1889 アオオビハエトリ 1M (加村 5/25), 1F (熊田 6/17a), 1M  
(萩野 6/17).

上記 127 種のうち、ヨツコブヒメグモ、ミナミホシヒメグモ、ナルコグモ、ナンキンヌカグモ、ミチノクフクログモ、チャクロワシグモの 6 種は、Japan Spider Catalog (2025) のデータに照らすと、滋賀県新記録である。

## 謝辞

伊藤博氏はじめ「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」のスタッフの皆様には、この採集会の立案と当日の実施に際してたいへんお世話になった。厚くお礼申し上げます。また、採集会に参加し、採集物をご提供くださった皆様、同定結果をお知らせくださった皆様、さらに、追加の調査を実施してくださった皆様に心から感謝申し上げます。

付記：2025 年度の採集会は、10 月 5 日にも山門水源の森で実施することが計画されていたが、雨天のため中止となった。

## 文献

Japan Spider Catalog 2025. Japan Spider Catalog ver. 1.1.4. online at <https://lookerstudio.google.com/reporting/affa70b1-2b26-4da6-b0ba-12c8cb5873b5> (閲覧日: 2026 年 1 月 20 日).  
関西クモ研究会 2020. 関西クモ研究会 採集会の記録 (2019 年度). くものいと, 53: 14–16.  
谷川明男 2025. 日本産クモ類目録 ver. 2025 R5. <https://www.asahi-net.or.jp/~dp7a-tknw/japan.pdf>  
吉田真・熊田憲一・西川喜朗・黒田あき 2012. 山門水源の森のクモ類. くものいと, 46: 15–22.  
吉田真・熊田憲一・西川喜朗・黒田あき 2014. 山門水源の森のクモ類 2. くものいと, 47: 34–50.  
吉田真・熊田憲一・西川喜朗・黒田あき 2017. 山門水源の森のクモ類 3. くものいと, 50: 6–13.

(文責：加村隆英)

## 関西クモ研究会 2025 年度例会の記録

2025 年 11 月 16 日（日）[13:00～17:00] に大阪市立自然史博物館で 2025 年度の例会が開催された。通常の会場における実施に加えて、オンライン（zoom を使用）による参加も併用された。

### 出席者

荒川真, 飯森槻丞, 飯森央子, 梶村太暉, 加村隆英, 川合あき, 佐々木善英, 清水裕行, 垂水有三, 中内恵理子, 原口岳, 松本吏樹郎, 村上協三, 山崎紫.

オンライン参加：岡田純二, 坂口瑠美, 関根幹夫, 中村香代子, 吉田真（オンライン参加者でお名前が漏れている方がいらっしゃるかもしれません）。



例会の参加者

出席者全員が自己紹介及び近況報告を行ったうえで、講演発表に移った。

### 講演

1. 松本吏樹郎：クモヒメバチの社会性クモ攻略法
2. 加村隆英：メキリグモ *Gnaphosa kompirensis* に近縁の未記載種
3. 清水裕行：日本列島ゴケグモ情報（2025 年を中心に）
4. 原口岳：大阪府のレッドリスト改訂に向けた取組

### 総会

#### [報告事項]

会員数：現在の会員は 91 名。

会費納付状況：会費を 2023 年度分までしか納入していない会員は 18 名。対応については今後検討する。

くものいと**の編集**: 例年3月末に発行しているが、これをもう少し早めたい。次号(第59号)の原稿締め切りは12月31日とする。

#### [審議事項]

#### 会計監査の選任

2025・2026年度の会計監査が未定であったが、事前に役員間で検討した人選が提示され、以下のとおり承認された。

会計監査: 川合あき氏

#### 2025年度採集会・例会の予定

採集会については、事前に役員間で検討した計画が提示され、以下のとおり承認された。実施日: 2026年5月24日(日)、2026年10月4日(日)。採集会の場所は未定。

例会の日程については、大阪市立自然史博物館の年間予定を見たうえで検討する(付記: 例会の日程は、後日、2026年11月8日(日)に決まった)。

#### 「くものいと」のカラー印刷

標記の件について、役員間で検討した内容が以下のとおり説明された。

「くものいと」の最近5号分のページ数の平均(総ページ数: 62, 写真のページ数: 20)に基づいて、写真のページをカラー印刷した場合の経費を見積もると86,800円(100部印刷)である。これに、採集会・例会の案内はがき送料、「くものいと」送料、「くものいと」発送用封筒代、例会開催時のzoomライセンス料等を加えると年間の支出は134,650円となる。会員数90人とすると、年間の会費収入は90,000円なので、単年度の赤字は44,650円になる。ただ、現在、本会の会計は前年度からの繰越金として約70万円を保有している。

これに基づいて、次の3つの方針案が示された。

- (1) カラー印刷にして、当面は不足分を繰越金でまかなう。
- (2) カラー印刷にすることを前提に会費を値上げする。
- (3) 現行の会費1,000円を維持し、カラー印刷にはしない。

審議の結果、以下が承認された。

次号からカラー印刷にする。経費の不足分には当面、繰越金を充当する。同時に、会計状況の推移を見ながら将来的に会費の値上げを検討する。

## 関西クモ研究会 2024 年度会計報告

	(円)
収入： 2023 年度からの繰越金	729,738
2024 年度分会費 前受分繰入	35,000
2024 年度分会費 年度内入金分	25,000
過年度分会費 2024 年度内入金分	13,000
くものいとバックナンバー販売時入金分	3,355
<hr/>	
<b>合計</b>	<b>806,093</b>
支出： くものいと No. 58 印刷費	60,654
くものいと No. 58 発送用封筒	1,478
くものいと No. 58 発送用スティックのり	770
くものいと No. 58 郵送料	18,920
くものいとバックナンバー郵送料	705
採集会・例会等案内ハガキ郵送料	17,768
例会用 ZOOM ライセンス契約	2,639
ゆうちょ銀行の「預金者情報の整理」用書類準備時送料	140
2025 年度への繰越	703,019
<hr/>	
<b>合計</b>	<b>806,093</b>

### 会費前受状況

2024 年度末における会費前受分の合計は、63,000 円である。内訳は以下のとおり：2025 年度分 38,000 円、2026 年度分 10,000 円、2027 年度分 7,000 円、2028 年度分 3,000 円、2029 年度分 3,000 円、2030 年度分 1,000 円、2031 年度分 1,000 円。

上記のとおり、報告します。

会計幹事 荒川 真

### 2024 年度会計監査報告

関西クモ研究会 2024 年度会計について、各種関係書類に基づき監査を行った結果、適正に処理されていることを確認しました。

2025 年 7 月 27 日 会計監査 榎元智子

## 第 60 号原稿募集

原稿受付締め切りは、**2026 年 12 月 31 日**です。

原稿は編集委員の加村隆英まで、電子メールでお送りください。

[kamura@haruka.otemon.ac.jp](mailto:kamura@haruka.otemon.ac.jp)

電子メールの「件名」には、必ず「**くものいと原稿**」と記してください。

他のメールに紛れてしまうことを防ぐために、よろしく願います。

### 原稿作成上の注意

原稿はワードで作成してください。

細かい書式は編集委員が整えますので、原稿においては適当でかまいません。

図（写真を含む）や表は、ワードの原稿に貼り付けて、およそのレイアウトを指示してください。ただし、編集の都合で、指示どおりにはならないこともありますので、ご了承ください。

レイアウトに特に指示のない場合は、図表を別のファイルとして提出していただいてもかまいません。

表は、エクセルで作成し、ワードの原稿に貼り付けた場合も、当該のエクセルのファイルを別に提出してください。

図をワードの原稿に貼り付けた場合は、特殊な場合を除き、別ファイルとして提出する必要はありません（別ファイルが必要な場合は、原稿受領後に連絡します）。

## 関西クモ研究会 会費納入のお願い

本会の年会費は年額 1,000 円です。

前納を原則としていますので、よろしくお願いいたします。

郵便振替口座 口座記号・番号 00990-6-240315  
加入者名 関西クモ研究会

他金融機関からの振込用口座番号

〇九九（ゼロキュウキュウ）店（099） 当座 0240315

会費納入に関するお問い合わせは、会計幹事の荒川までお願いいたします。

会計幹事：荒川 真 E-mail: [arkw0arachnids@gmail.com](mailto:arkw0arachnids@gmail.com)

---

## 関西クモ研究会

2025-2026 年度

会 長 加村隆英 E-mail: [kamura@haruka.otemon.ac.jp](mailto:kamura@haruka.otemon.ac.jp)

庶務幹事 原口 岳 E-mail: [h1r1g3ch2@gmail.com](mailto:h1r1g3ch2@gmail.com)

会計幹事 荒川 真

編集委員 加村隆英

会計監査 川合あき

顧 問 西川喜朗・吉田 真

ウェブサイト [http://kansaikumo.sakura.ne.jp/kansaikumo/index\\_kansaikumo.html](http://kansaikumo.sakura.ne.jp/kansaikumo/index_kansaikumo.html)

---

くものいと 第59号  
2026年2月20日発行  
関西クモ研究会

---